第5章●子どもと社会

千葉市教育センター所員
上杉賢士

はじめに

今、子どもと社会とのかかわりを考えるとき、異なる2つの側面があるように思える。

そのひとつは、いわゆる「社会化」の側面である。これは、社会が要求する行動規範を身につけ、あるいは、自分なりの価値観を形成しながら、来たるべき社会人としての自立のために準備をすることを意味する。

ところが、最近、人間の一生に占める「子ども時代」の割合が大きくなったのではないかという指摘がある。

たとえば、深谷和子氏の試算によれば、現代の子どもたちの「子ども時代」は、人生全体の30%をも占める。そして、この数値は明治初期の子どものそれと比較すると、ほぼ3倍にもなったという（『遊びと勉強』中公新書P.64～65）。

加えて、「モラトリアム人間の増加」という指摘にも見られるように、子どもとおとなの境界があいまいになったという事情もある。

こう考えると、「子ども時代」を「おとなになるための準備期間」としてのみ見ることは、幾分修正しなければならないのかもしれない。「子ども時代」のもつ意味を、残りの期間における判定に委ねるにしては、30%という比率は、いかにも大きすぎるという気がするからである。

もちろん、社会から受ける影響が将来においてどのような意味をもつかも、検討すべき重要な問題であることには変わりはない。

しかしそれ以上に、今、彼らの実際の生活ぶりにどのような影響が現れているかをつぶさに検討することのほうが重要であると思う。

本章では、そうした両面を考慮しながら、あらためて子どもと社会とのかかわりの現状を探ることにしたい。

1. 子どもの経済感覚

まず、経済的な側面から、子どもと社会とのかかわりをとらえてみよう。

図5－1は、自分の家の経済水準について評価を求めた結果である。

一見してわかる通り、全体としてほぼ7割が「ふつう」と答えている。これに「豊か」の約2割を加えると、9割もの子どもが「ふつう以上」とわが家の経済水準を高く評価していることになる。

そして、vol.2－4「子どもの経済感覚」では、こうした感じ方に、父親の職業による差がほとんど認められないことが指摘されている。

おとなたちの中に広がるいわゆる中流意識は、その度合いを一層強めて子どもの世界にも浸透していると考えてよさそうである。

わが家の経済水準を豊かとみるか貧しいとみるかは、いわば相対的なものである。したがって、分布の上からは、「豊か」と考える層と同じくらい「貧しい」とみる層が存在しても不思議ではない。

おそらくこのデータの背後には、「人並み」の暮らしを子どもに提供しようとする多くの親たちの配慮や努力が存在するのであろう。

そして、子どもの時代にかなりの「豊かさ」を感じて育つ子どもたちは、それが将来にもずっと続くことを信じて疑わない。

たとえば、図5－2では、ほぼ4割の子どもたちが、少なくとも今よりは一層豊かになるだろうと思っている。そして、多少なりとも将来に不安を抱く層は数%でしかない。

昭和30年代に端を発する高度成長期を経て、わが国では「豊かな」生活が実現した。その内実はともあれ、そうした時代以後に生まれた現代の子どもたちが、将来に不安を感じにくいのは当然かもしれない。

そして当然のことながら、経済的発展を遂げ、豊かな暮らしを実現するためには、それ

相応の努力が必要であった。そうした部分への認識が欠落したまま、ただ「豊かさ」を享受するだけの彼らの生活感覚に不安をおぼえないわけにはいかない。

さて、それではもっと具体的に、彼らが手にするこづかいの額について、どのような意識を持っているかを確かめてみよう。

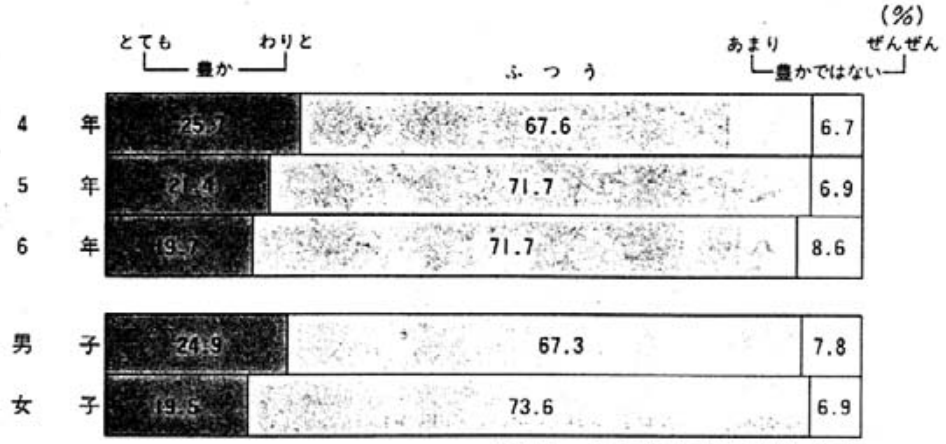
まず、図5－3は、もらったこづかいが早くなくなってしまうことがないかどうかをたずねた結果である。

性差や学年差もかなり認められるが、全体としては、「めったにそうならない」という子どもが半数近くを占める。これに「たまにそうなる」の4割近くを加えると、大半の子どもたちが、現状の金額にほぼ満足をしているようにみえる。

ところが図5－4に掲げた結果に注目すると、3割を超える子どもたちが、今のこづかいの額に不満を表明している。

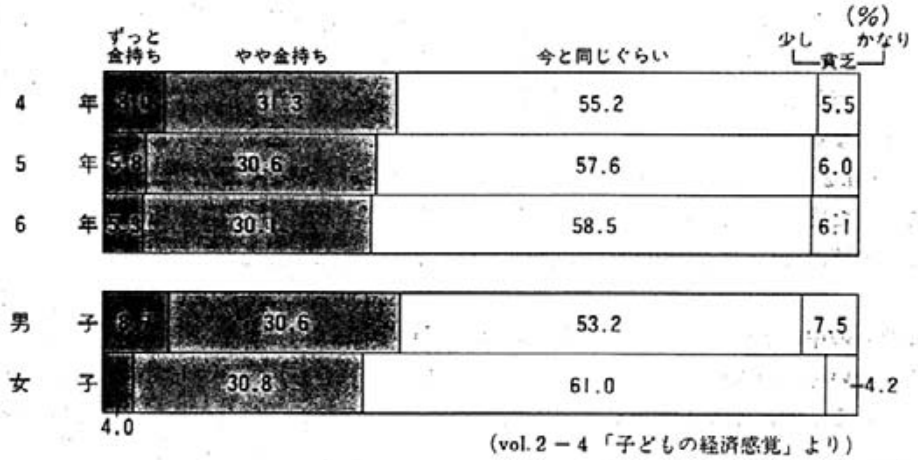
この矛盾はどこから生じているのであろう

図5－1　わが家の経済水準



(vol.2－4「子どもの経済感覚」より)

図5－2　将来作る家庭の経済水準



(vol.2－4「子どもの経済感覚」より)

か。

考えてみれば、現在、子ども向け市場に出回っている商品は、すこぶる高額である。テレビゲームを例にすれば、本体は親が買い与えるとしても、ゲームソフト1枚でも数千円はする。これを、せいぜい月額千円というこづかいで買うのは到底無理な話である。そこで、何らかの形で親が別途に支給してくれた額を合わせて買い求めるということになる。

おそらく毎月手にするこづかいは、マンガ雑誌やスナック菓子といった少額の商品にふり分けられているのだろう。そして、子どもたちが本当にほしがる商品は、それとは別に親の援助をあてにするという消費行動のパターンが存在する。

念のために、図5－5にご注目いただきたい。

これは、自分がもらったお年玉の金額と、友だちがもらった推定金額を比較したものである。

このデータはほぼ10年前のものであるため、現在、実際にもらう金額は、ほぼ数千円から1万円程度上積みされているものと思われる。

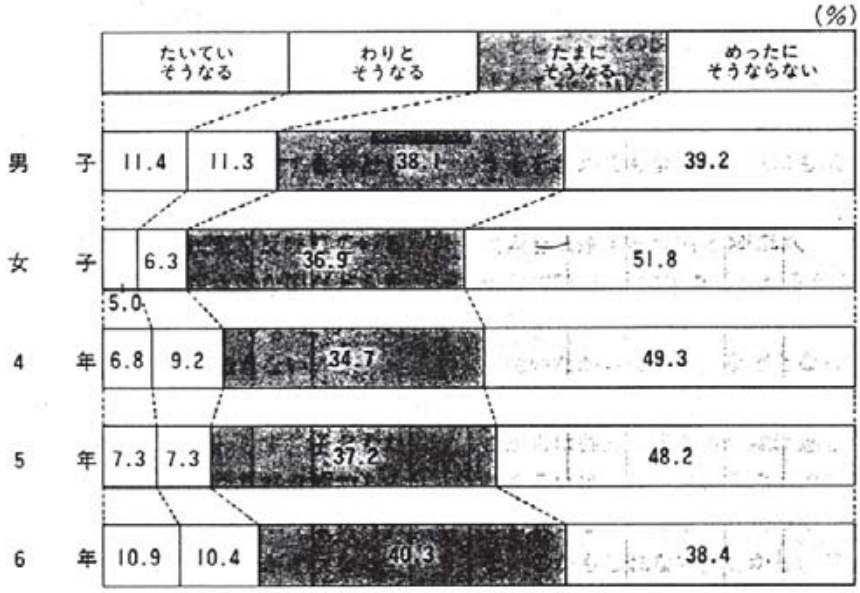
いずれにしても、子どもたちは、友だちは自分よりもはるかに多くのお年玉をもらっていると思っている。

当時の金額でいえば、「自分が実際にもらった金額」として示された2万円が、平均的な額であった。にもかかわらず、友だちは自分の2倍ももらっているのだろうと推測している。

「豊かな」生活を謳歌する一方で、欲求はますます拡大されている。いわば、フラストレーション状況の下に置かれているのである。

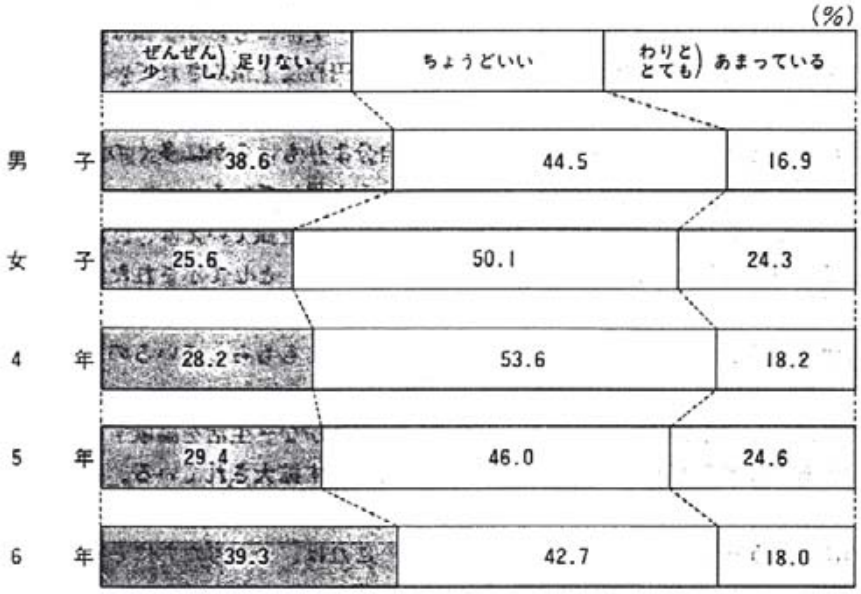
これは、子どもたちにとっては「豊かな」時代がもたらした新しいタイプの不幸だといえないだろうか。

図5－3　もらったこづかいが早くなくなってしまうこと



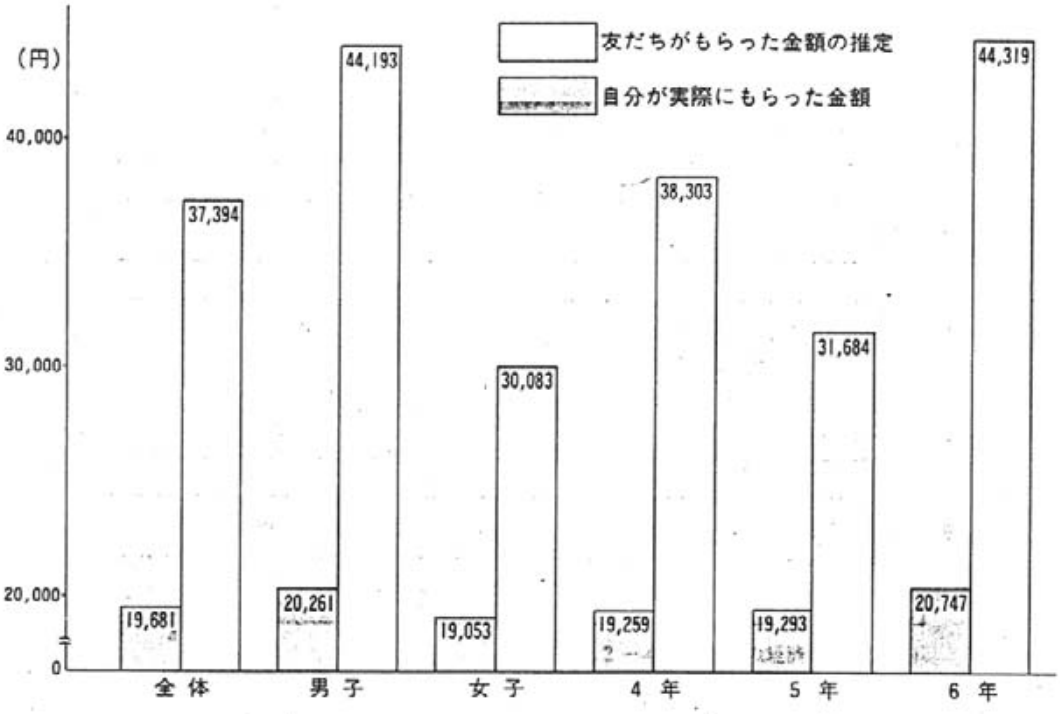
(vol.2－1「子どもとこづかい」より)

図５－４　今のこづかいでは



(vol.２－１「子どもとこづかい」より)

図５－５　友だちはお年玉をいくらくらいもらったと思うか



(vol.１－６「子どもとお年玉」より)

2. 子どもの中の民主主義

次に、子どもたちの社会化における重要なファクターのひとつである政治的な側面からのデータを紹介しよう。

まず図5－6は、現代社会に対する子どもたちの評価の結果である。

子どもたちは、選挙は民意を反映していると思っているし、日本は民主的な国だとも思っている。そして、決して一部の「えらい人」に政治を委ねようという意識もない。

今日の政治的状況が、国民には大変わかりにくいものであるにもかかわらず、子どもたちの中にある社会観は、かなり好意的である。

そうした傾向をひとまず読み取りながら、それでは、教室の中の民主主義がどうなっているかを確かめてみよう。

図5－7は、クラス代表になった経験の有無をたずねた結果である。

それによると、約半数の子どもたちは「1度もない」という。

そして、次の図5－8では、クラス代表に「とてもなりたい」と答えている子は、わずか7％にしかすぎず、「なってもいい」という子を含めても全体の4割にも満たない。

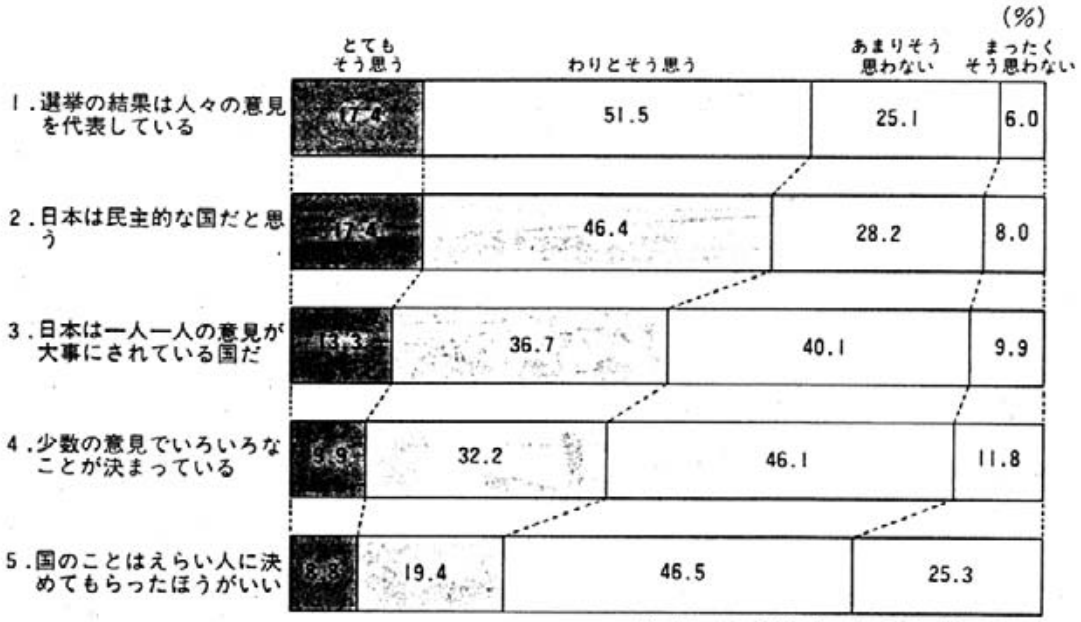
データは省略したが、子どもたちがクラス代表を敬遠する理由としては、「忙しそうだから(77％)」「文句を言われるから（64％)」「めんどうくさいから(59％)」「目立つことが嫌いだから(56％)」などとなっている。

こうしたデータを見る限り、少なくともそこからは強烈な当事者意識は感じとれない。

あるいは、リーダーそのものが特定の力量を必要として、誰もがなれるというものではないのかもしれない。しかし、フォロアーの役割にのみ安住するという考え方も、民主的態度形成の上からは、片手落ちといえるのではなかろうか。

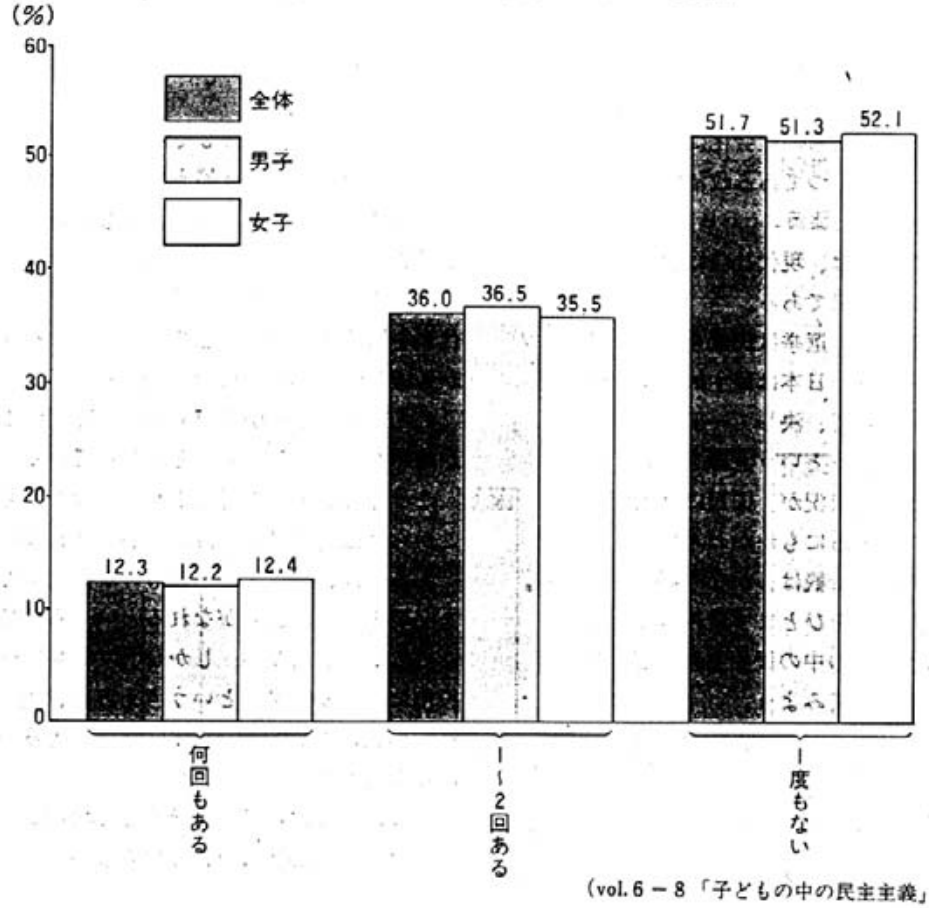
学校教育においても、そうした角度からのアプローチが必要に思えてならない。

図５－６　現代社会に対する評価



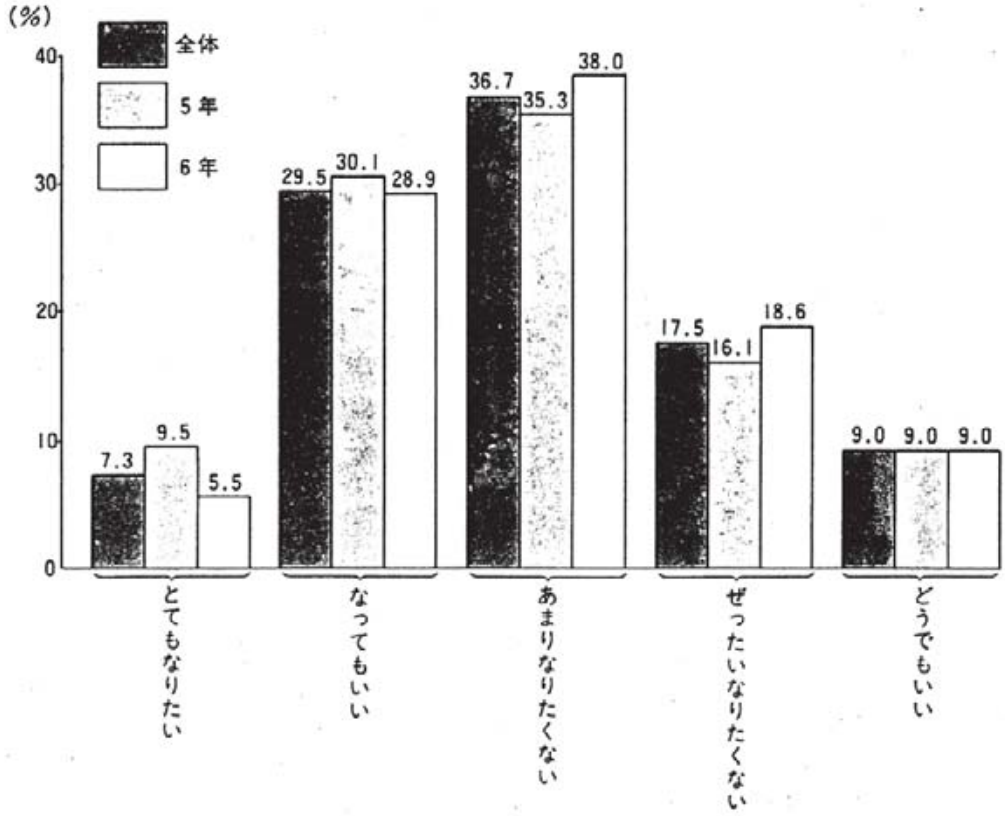
（vol.６－８「子どもの中の民主主義」より）

図５－７　クラス代表になった経験



（vol.６－８「子どもの中の民主主義」より）

図5－8　クラスの代表になりたいか



（vol.6－8「子どもの中の民主主義」より）

3. 子どもと職業

図5－9と図5－10には、子どもたちが将来なりたい職業を性別に掲げた。

まず、図5－9の男子の結果からみてみることにしよう。

男子に最も人気があるのは、「プロスポーツの選手(44%)」である。そして第2位に「サラリーマン(24%)」が位置する。この2つの職業は、いわば「夢」と「現実的可能性」の両極に位置づく。しかも、「サラリーマン」の次に「大会社の社長」が位置することを考えれば、いわゆるトップよりヒラを歓迎する子どもたちの胸の内が読み取れる。

次に、図5－10から女子の結果を読み取ると、上位は「小学校の先生(43%)」「デザイナー(32%)」「テレビタレント(28%)」などが占めている。

こうした結果は、何を意味するのであろうか。その点を考察するために、本シリーズvol.8－10で公表された国際比較調査の結果を一部引用する。

データは省略するが、その調査の対象となった国々の子どもたちは、いずれも「なりたい職業」として「政治家」や「法律家」「医者」など、社会的責任の重い職業をかなり上位にあげていた。

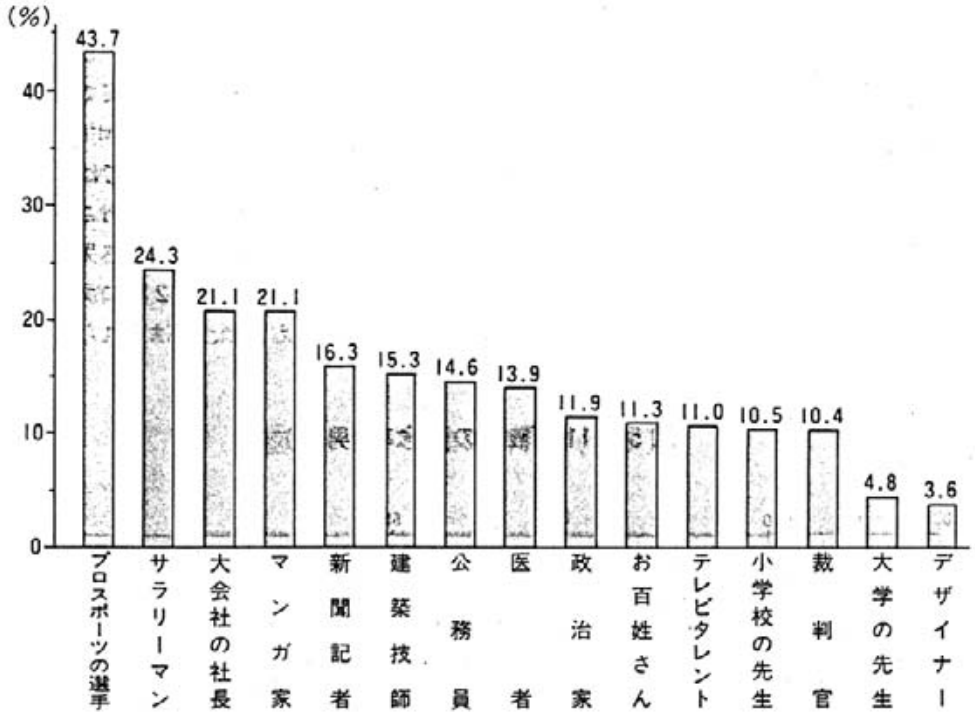
つまり、「将来つきたい職業」が「社会的達成の方向」という明らかな意味を持っているのである。

それと対比させていえば、わが国の子どもたちが描く職業観は、いわば「欲求充足の方向」にあると考えてもよさそうである。

職業そのものが、多少なりとも社会的責任を帯びることは避けられない。むしろ「職業的社会化」という観点からいえば、より社会的責任を強く求められる方向に夢を描くことが、子どもたちにとって健全な姿なのかもしれない。

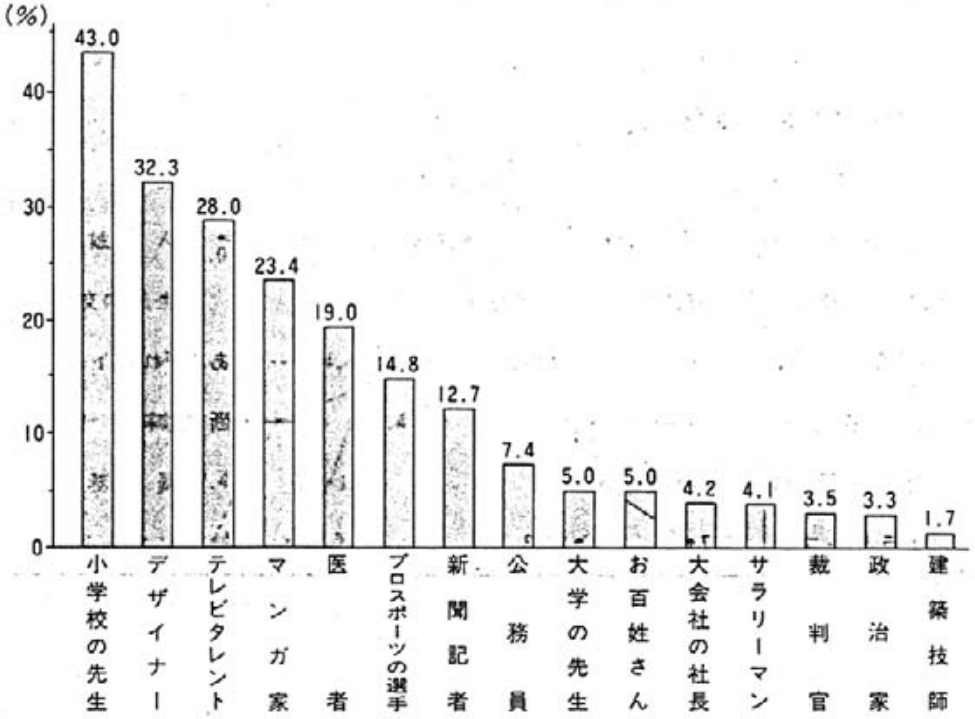
とすれば、クラスの代表ですら避けようと

図5－9　男子のなりたい職業



(vol.3－6「職業観」より)

図5－10　女子のなりたい職業



(vol.3－6「職業観」より)

していたのと同様に、ここでもまた社会的責任を回避しようとするわが国の子どもたちに一抹の不安をおぼえるのは筆者だけではあるまい。

子どもたちのそうした現状を説明するために、次の3つのデータを用意した。

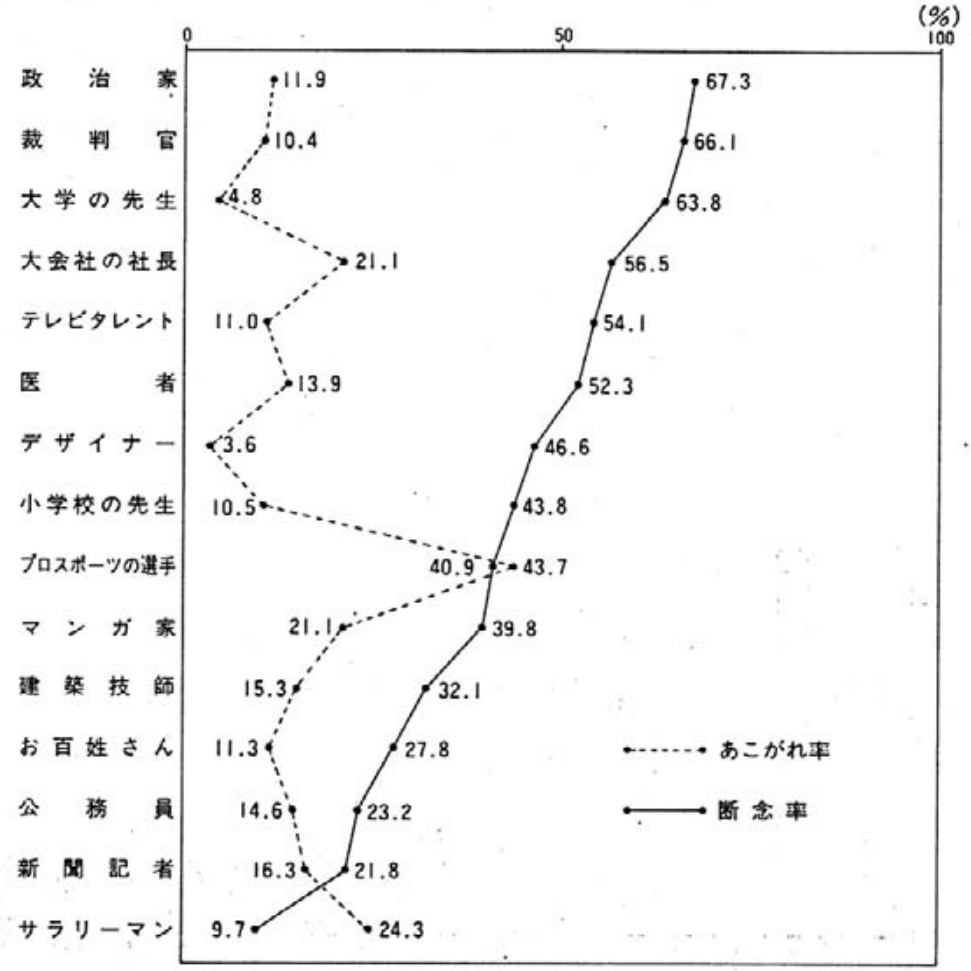
まず、図5－11と図5－12は、どんなにがんばってもなれそうもない職業について回答を求めた結果である。

男女とも、「政治家」「裁判官」がそれぞれ7割ほどの高率で1位と2位を占めている。

そして、さらに問題視すべき点は、ほとんどの項目において、断念率があこがれ率をはるかに上回っているという事実であろう。

わずかに、男子では「プロスポーツの選手」と「サラリーマン」が、女子では「小学校の先生」と「デザイナー」が、あこがれ優位の傾向にある。このいずれもが、男女それぞれのなりたい職業の1位と2位にランクされていたことを考えると、実はそれらが、彼らに

図5－11　職業の断念率(男子)



(vol.3－6「職業観」より)

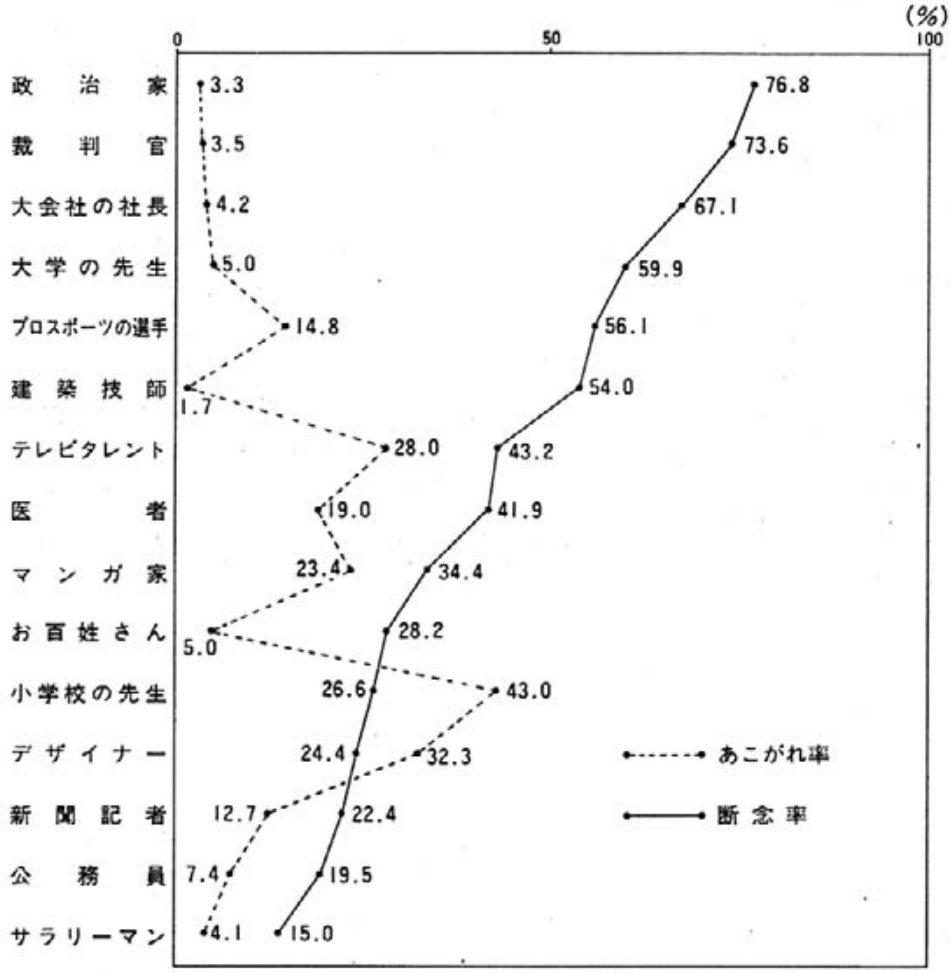
残された「最後の砦」なのかもしれないと思う。なれそうもない職業を塗りつぶしていくという、いわば消去法の結果として浮かび上がってきたのが「プロスポーツの選手」であり「小学校の先生」であると読み取るのは、悲観的すぎるのであろうか。

次の図5－13には、子どもたちが好む職業の条件に関するデータを掲げた。

上位から項目を連ねて、そのプロフィールを描くと、〈決まった時間に帰宅して、家族との団らんが持てるような、そして収入はほどほどでいいから好きな仕事がしたい〉と、顕著なマイホーム志向がうかがえる。

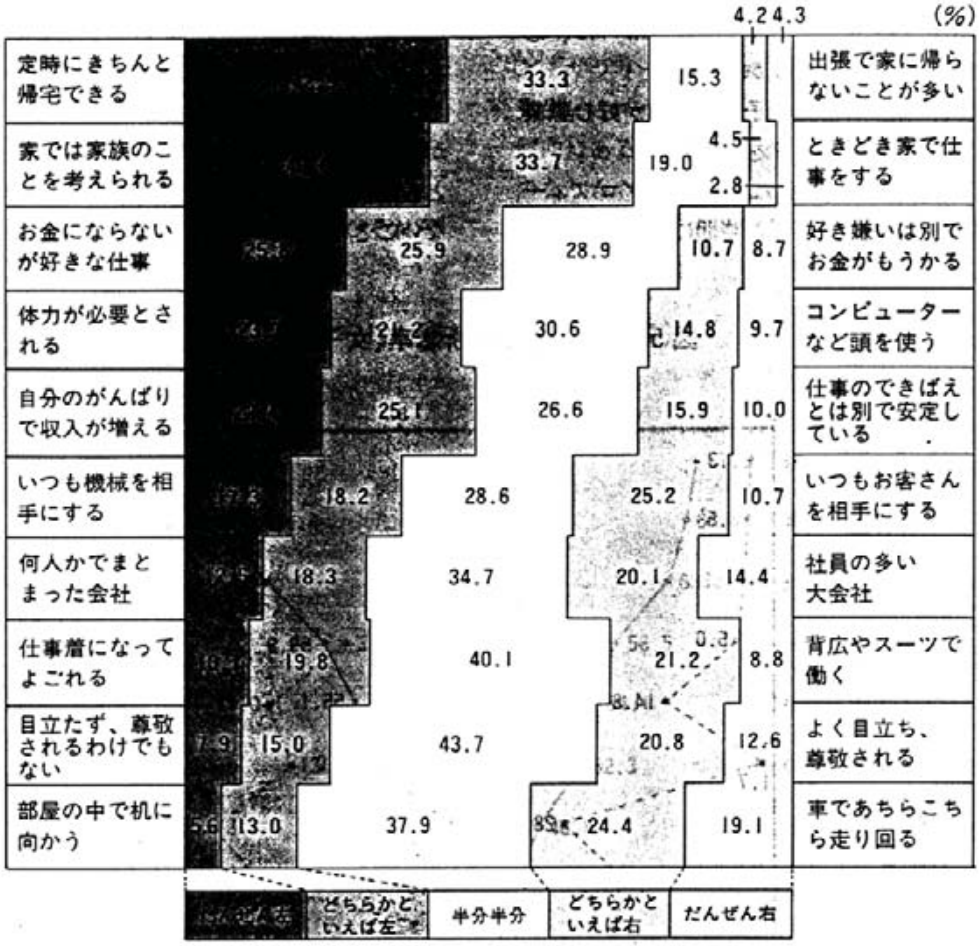
学業成績に関する自信を失い、最後に残された体力と誠実さを資本として、こじんまりとした生活の設計を図ろうとする子どもたち。こう読み取ってしまうのはいかにも心苦しいが、彼らにとって、将来の職業展望に少なくとも社会的達成という大きな野心を読み取れないことは疑いのない事実である。

図5－12　職業の断念率(女子)



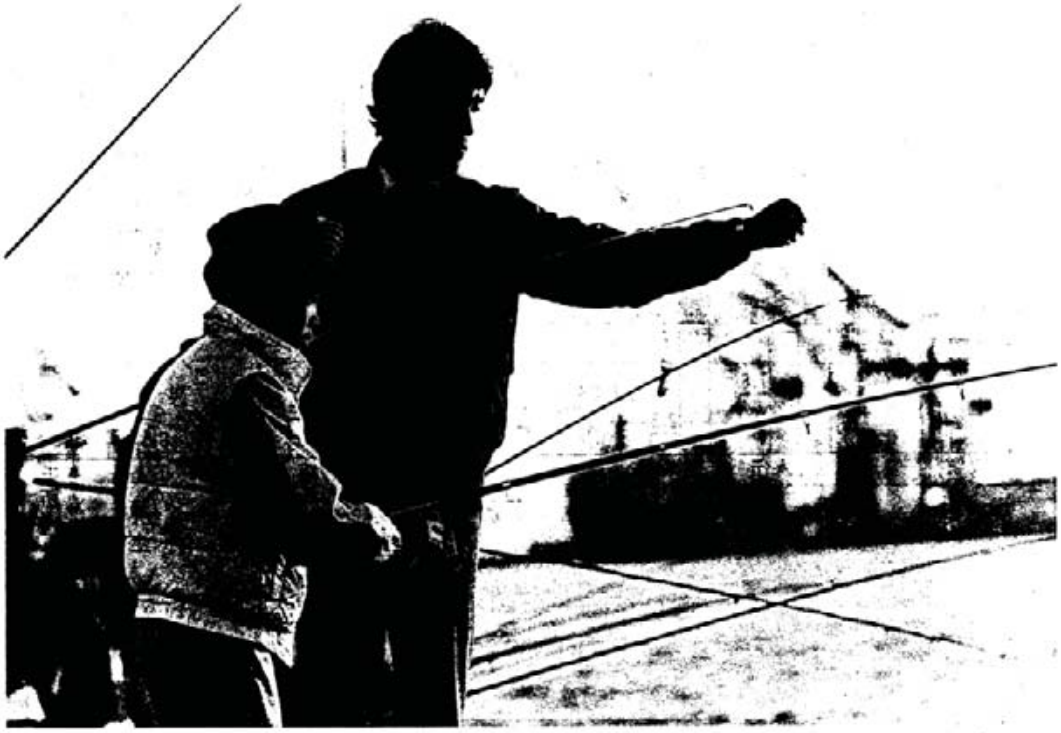
(vol.3－6「職業観」より)

図5－13　好まれる職業の条件



(vol.3－6「職業観」より)

4. 子どもの尊敬する人



最後に、子どもたちの尊敬する人物を明らかにしておこう。この作業には、おそらく子どもたちの視野がどのくらいの広さを持っているかを確かめる意味がある。

図5－14でまず目につくのは、両親の存在である。男子の34%が父親、13%が母親を、また女子の33%が父親、27%が母親を「一番尊敬する人」としてあげている。

むろん、子どもにとって一番身近な存在である両親が尊敬の対象としてあげられるのは、悪いことではないかもしれない。しかし、これだけマスコミュニケーションが発達し、子どもたちが広く開かれた世界に目を向けていると思われる時代でも、なお子どもたちが「両親」を第一に尊敬する対象としてあげている点には、多少のひっかかりを感じないわけにはいかない。

また両親以外でも、友だちや担任の先生など、子どもの身近にいる人々を合わせると、かなりの割合を占めてしまう。

子どもたちをとりまく人間関係に、彼らがそれなりに満足している結果だとも考えられる。しかし、そうした日常から一歩も二歩も飛躍するためには、ビッグな目標や大きな同一化の対象といった存在がなくていいのだろうか。

念のために、子どもたちがあこがれる職業の上位にあげた「スポーツ選手」と「タレント」に対する意識を、図5－15と図5－16に掲げた。

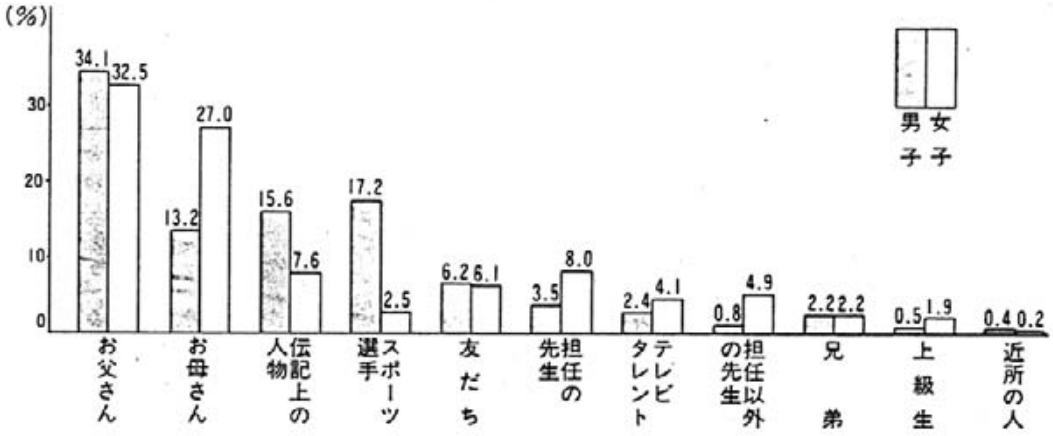
そのいずれにおいても、「その人のようになりたい」という子どもの割合は、「その人を尊敬している」という割合を下回る。

つまり、「尊敬はするが、別に自分がそうなりたいわけではない」という冷めた視線がアイドルたちに向けられているのである。

どうやら、尊敬の対象と目標とする人物とは必ずしも一致しないらしい。そして、それ

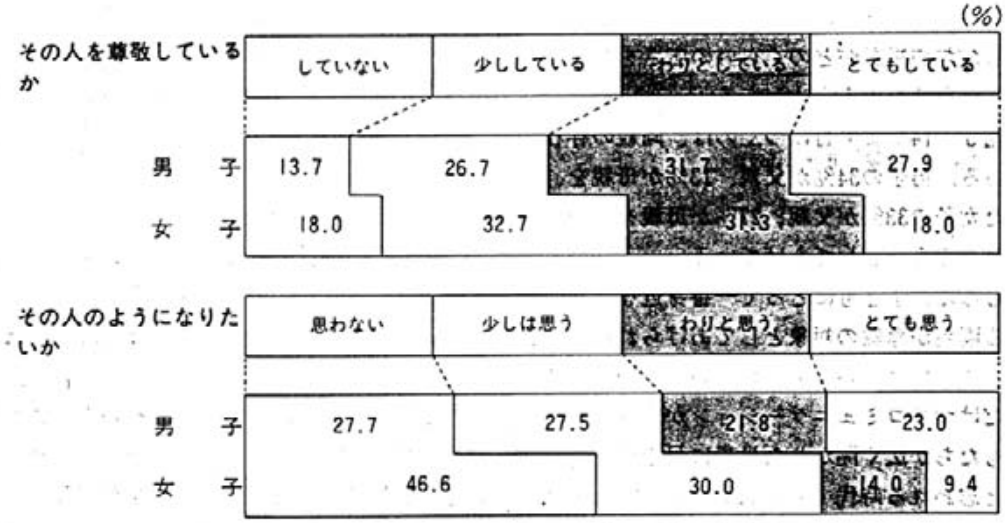
ほどビッグな目標を持てなくなったというの　　れない。
が、今の子どもたちの率直な現実なのかもし

図５－14　尊敬する人物



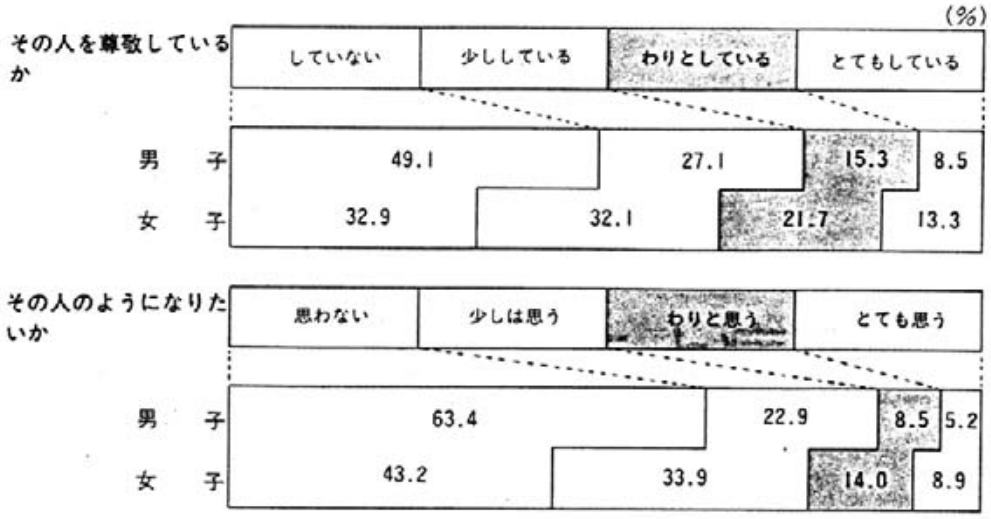
(vol.５－１「ヒーロー」より)

図５－15　スポーツ選手に対するファン意識



(vol.５－１「ヒーロー」より)

図5－16　歌手やタレントに対するファン意識



（vol.5－1「ヒーロー」より）

若干のまとめ

冒頭にも述べたように、「子どもの時代」が実質的に長くなったという事実は、一面では、保護された状態で社会の現実を見つめることを意味する。しかも、そうした状態のまま、現実のきびしさを伝える情報は、子どもたちに対しても容赦なく浴びせられる。

とすれば、視線だけは広く社会に向けながらも、いわば「半人前」の状態に甘んじようとする子どもたちの心情がわからないでもない。

そうした子どもたちに、われわれおとなはどう対応すればよいのだろうか。あるいは、彼らに提供している「豊かな」生活を、もう一度見つめ直すことから、新たな方向が発見できるのかもしれないが……。

第6章●子どもと病理

千葉県総合教育センター所員
中原美恵

はじめに

今、子どもたちはかつてないほど恵まれ、整った環境の中で育っているといわれる。これまでのレポートの中にも、豊かな日本の子どもたちの姿がかいま見られた。衣・食・住のどれもほどほどに満たされ、親たちは子どもの教育に熱心である。いつも身ぎれいで整った子どもの姿は、日本中どこに行ってもさほど変わりがない。また、子どもの教育費の負担も年々高じており、学習塾におけいこごとにと子どもたちは多忙である。このような子どもの生活の変貌ぶりは、かつて予想しえなかったものであろう。

しかし、こうした状況を手放しでよろこんでいるわけにはいかない。豊かな社会であるがゆえに、子どもの育ちにかげりが生じているのではとの危惧もささやかれ始めた。たしかに、この十年あまりの間に、校内暴力、登校拒否、家庭内暴力、いじめ、自殺、そして非行問題と、子どもたちから次々と新たな問題行動が提示され続けてきた。しかも、これまでは中学生期を中心とする思春期の少年たちが主役であったが、今日、その低年齢化のきざしも見られる。小学生だからといって、決して楽観できる状況ではなくなっているのである。

これらの問題を通し、子どもの自我の脆弱さや動物としての生命力の乏しさなど、心身共にひよわな子どもの姿が指摘されることが多い。豊かで快適な生活の中で、子ども本来の成長が阻害されてきたためであるという。

むろん、貧しい昔の子ども時代のほうがよかったと言うつもりはない。しかし、21世紀に生きる子どもたちの心と体の成長にどのような歪みが見いだされるのか、あらためて検討する必要があるように思われる。そこで、本章では一見くったくのない子どもたちのうちにひそむ病理現象を、調査レポートをもとに探ってみたい。

1.「半健康」の子どもたち

「食欲がない」「朝礼などですぐ倒れる」「骨折しやすい」など、子どもの体力、生命力の低下が懸念されている。一方で、かつてと比較すべき統計資料がないため、必ずしもそうした見解は正当でないとの反論もある。今日の子どもの健康状態をどうとらえたらよいのだろうか。その手がかりとして、図6－1に子どもの病気・事故経験のデータを掲げた。これは、小学4年生から6年生の子どもたちがこれまでどのような病気や事故に出会っているかを母親にたずねた結果である。

感染症の中でも「水痘」の罹患率が群を抜いているが、現在ワクチンの予防接種が実用段階にないためといわれる。かつて子どもの命定めの関門と恐れられていた「はしか」は、ワクチンの開発や子どもの栄養状態の改善により死亡率は大きく低下している。予防医学の進歩が、感染症から多くの子どもの生命を守り、母親たちを安心させた功績は高く評価されよう。

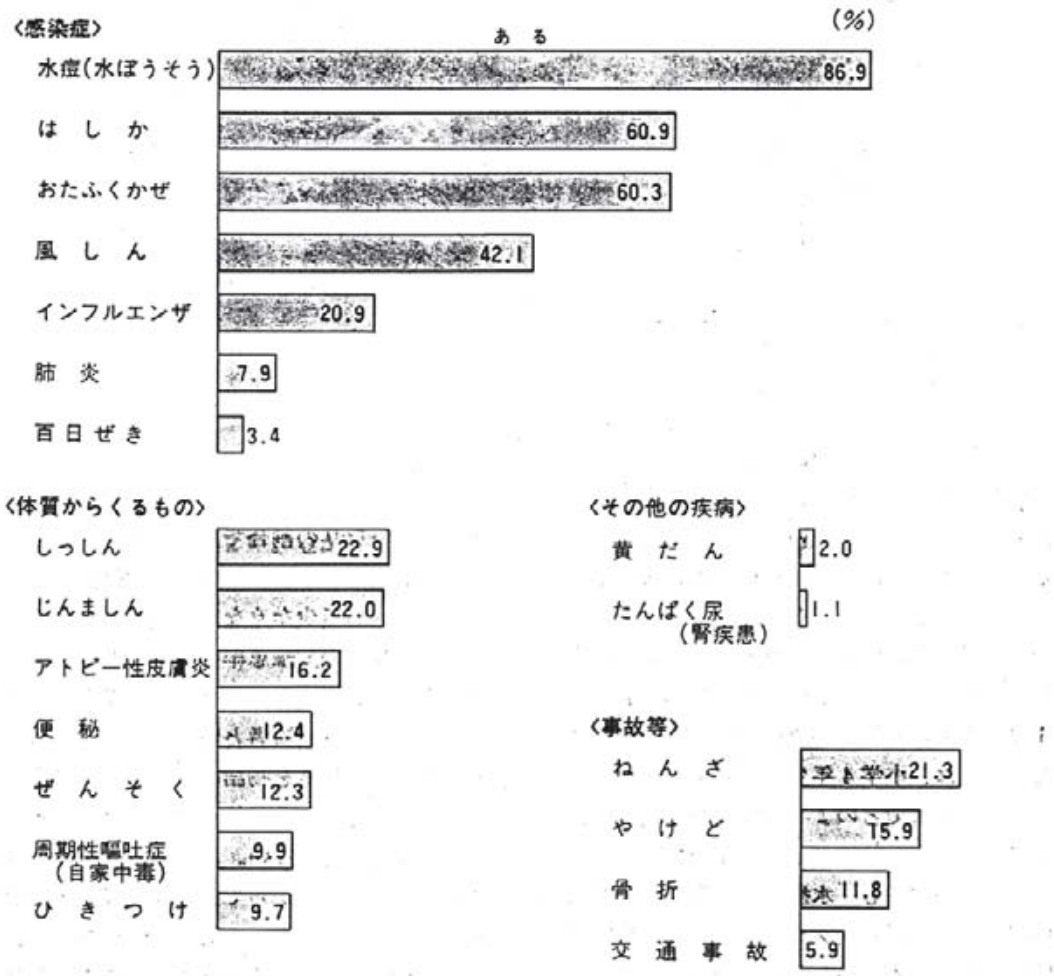
ところがその一方で、主として体質からくる疾患がかなりの割合で見られる点が目を引く。また、「ねんざ」「やけど」「骨折」といった事故も決して少なくない。比較のための罹患統計がないので罹患率の推移はつかめないが、5人に1人はアレルギー体質であり、10人に1人は骨折経験者という数値は、やはり子どもの体の異常を物語っているように思われる。また、「交通事故」にあった子が6％もいる点も見逃せない。これらの疾患や事故は、治療が長びきがちで、しばしば二次的なトラブルを生じやすい。幼児的退行を含む、疾病逃避からいつまでも身体症状にこだわり続ける子、疾病やケガに対する過度の不安を示す子などがその例である。子どもの心と身体は密接に結びついている。身体的トラブルが、心の成長に微妙に影を落とすのである。

図6－2に見られるように、いまひとつ自

分の体調に自信のない子どもは、意外に多い。これは子ども自身に体調の自覚症状をたずねた結果であるが、まるでおとなの不定愁訴をきくようである。心の不健康さが生み出す体の不調へのこだわり、自律神経系の異常が訴えの中核となっている。「朝、なかなか起きられない」「乗り物に酔いやすい」「小さなケガをしやすい」と上位に並ぶ。また、出現率はさすがに低いが、腰痛、肩こり、倦怠感といった症状も2割前後の子どもに見られる。かつての子ども像からは思いもよらない結果である。それだけ現代の子どもたちは、緊張した生活を強いられているということだろうか。

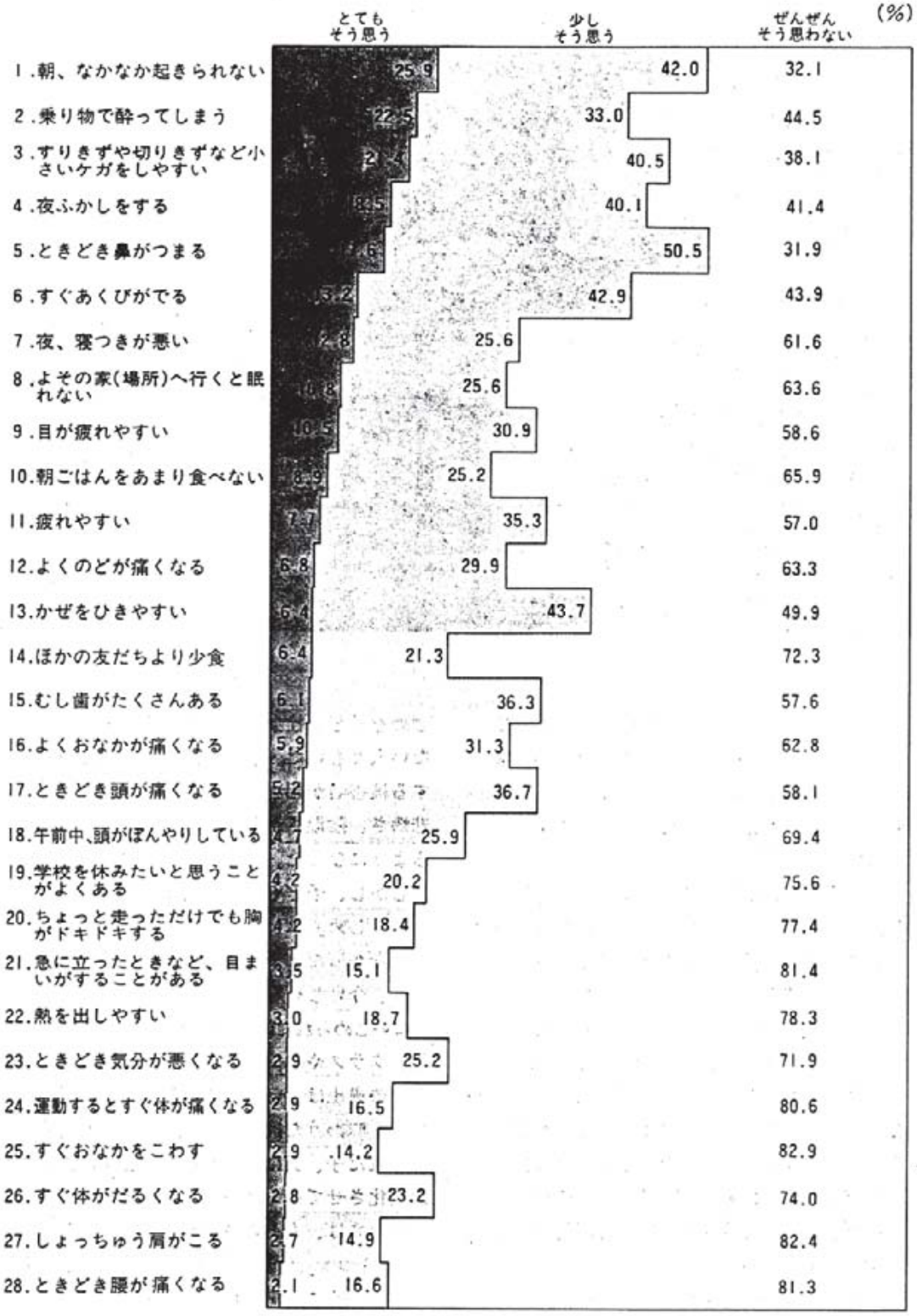
いつもどこか不調感をおぼえて暮らす「半健康」状態の子どもの増加は、やはりひとつの病理現象ととらえてよいだろう。

図6－1　病気・事故経験



(vol.5－4「病気」より)

図6－2　子どもの不定愁訴(子どもの自己評価)



(vol.5－4「病気」より)

2. 子どもの人間関係の歪み

子どもの世界に陰湿ないじめがひろがっているというデータは、親たちにかなりの衝撃を与えた。図6－3は昭和58年12月に、小学4年生～6年生を対象に行ったいじめ調査の結果である。当時、多少ともいじめが起きているクラスは、4年生で6割、5年・6年で5割という数値であった。高学年になるといじめの対象が1人とか2人とかにしぼられ、集団による特定の個人へのいじめが長期にわたって続く傾向が見られる。しかも、たいていそうしたいじめは、「何のきっかけもなく、突然に」始まるというものであった。具体的ないじめの方法は、年齢によって様相が異なる。ぶったり、ひっかいたりといった直接的攻撃は低学年に多く、仲間はずれや批難といった言葉による攻撃や暗黙の心理的攻撃は高学年に多いという具合であった。

当時、「いじめは昔もあった」とか「いじめられる子に問題がある」というように、いじめを子ども社会の病理として認めようとしない人々もいた。しかし、いじめを苦に自殺する被害者が相次ぎ、次第にいじめの実態の悲惨さ、陰湿さが関心を持って受け入れられるようになった。

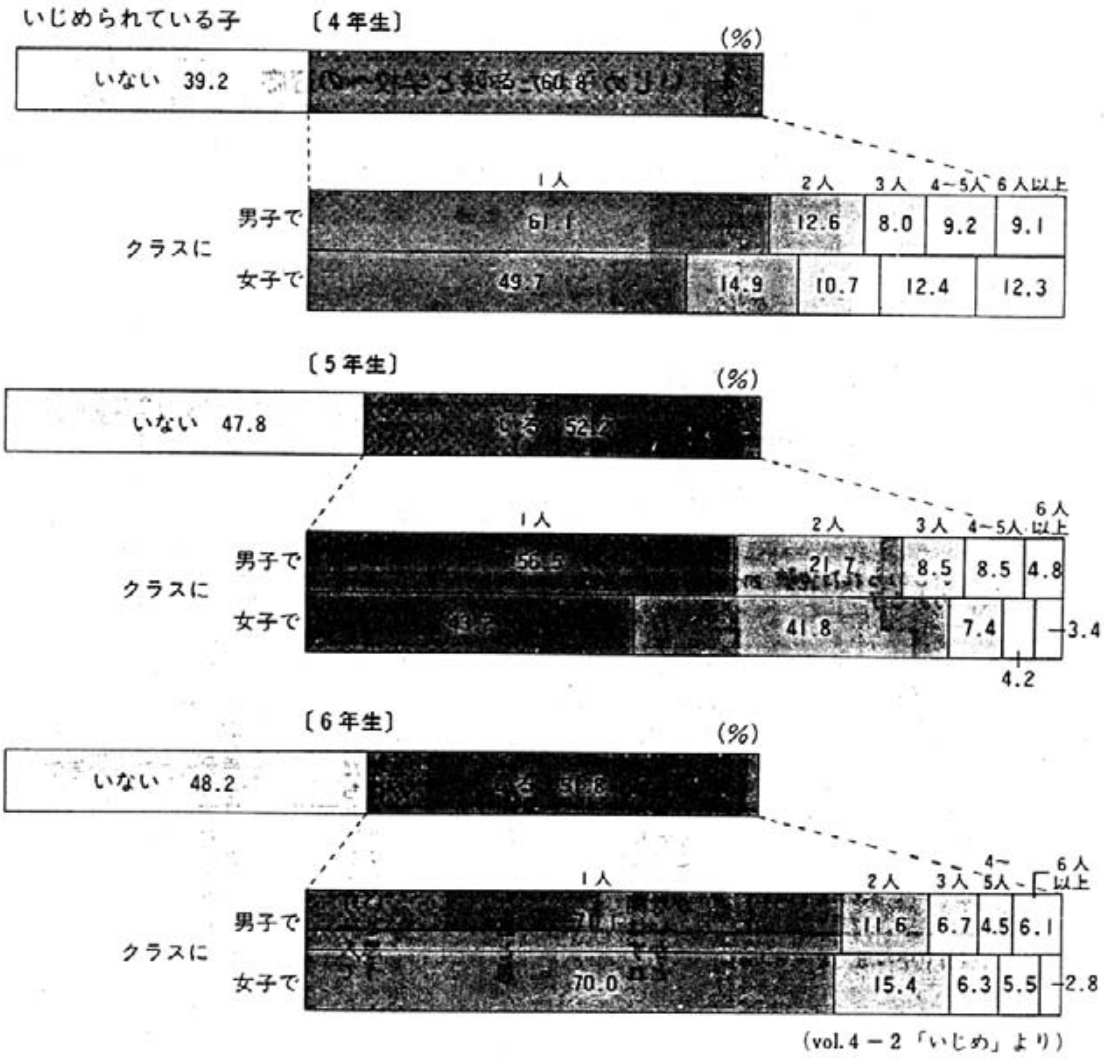
しかし、子どもの人間関係の歪みを象徴する「いじめ」は、そう容易に解消されるものではなかった。また、図6－4に示されるように、今いじめられている子はもちろん、過去にいじめられた体験を持つ子の心にも傷を残し、クラスや学校への不信感が尾を引く。いじめの風土は、いじめている子同志が仮の連帯感を味わうだけで、結局、いじめた子、いじめられた子、共に人間不信と自己像の歪みを深刻化させてゆくばかりである。そうした子どもたちは、人とのかかわりを避け、テレビ、「ファミコン」、マンガへと、ひとり没頭してゆく。傷つくことを恐れ、孤立化する子どもたち。しかし、そうしているうちに彼らは、対

人関係のムレの中で生きてゆく力をますます失っていくのではないだろうか。

「いじめ」という病理現象を通して、われわれは、子どもの中に育てそこなってしまっていた「他人への思いやりの心」の重みに気づかされた。人と人との関係の中で生きるためには、お互いに他を思いやる心が何より必要である。しかし図6－5に見る限り、彼らはクラスの友だちにさえもあまり親切ではない。行為率の高い項目は、10「誕生日プレゼント」や9「読みかけのマンガを貸す」など、少し自分ががまんして物を提供するくらいのことである。もう少し面倒で大きな犠牲を払うような思いやりは、極めて体験が少ない。

また図6－6に見られるように、相手との親しさや、こちらの犠牲の大きさによって、子どもたちの思いやり行為の実行率は、また変わる。A）では、人間関係がぐっと深ければ親切にするが、「ふつうぐらいの友だち」では、「たぶん～してあげる」とやや自信がなさそうである。B）では、自分の側の条件で、

図6－3　現在のクラスのいじめの状況



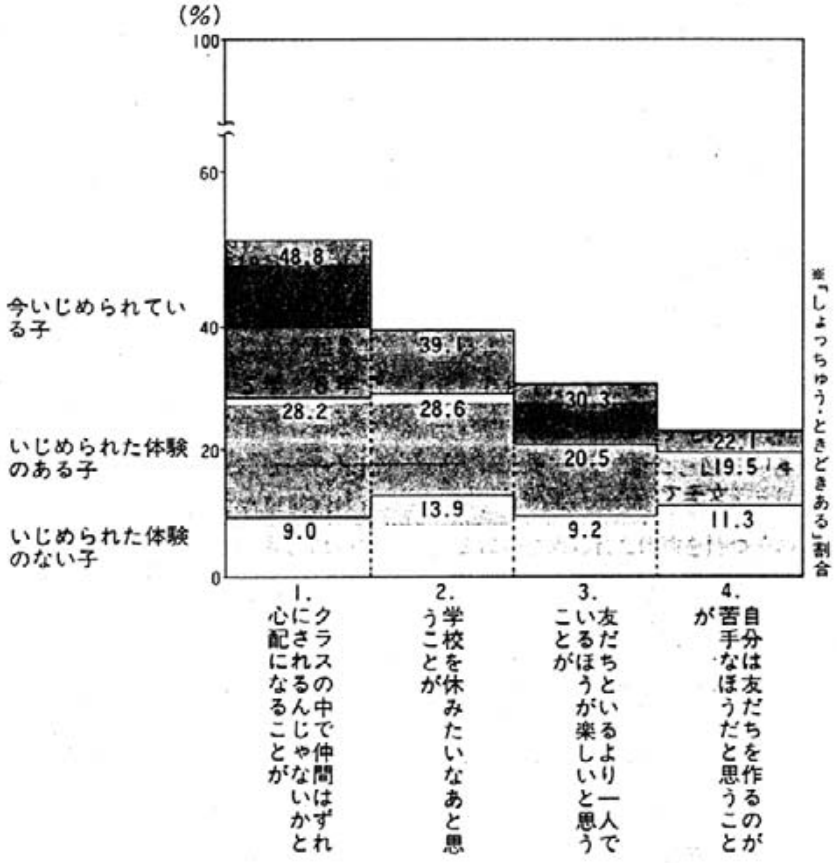
（vol.4－2「いじめ」より）

「70歳くらいのお年寄りに席をゆずる」という思いやり行動がどう変わるかをみている。すると子どもは、自分が「疲れているとき」や「長いこと乗っているとき」は席をゆずらないと答え、また「わりと元気なとき」でも2割の子はやはり「席をゆずらない」という。ずい分と身勝手で思いやりのない子どもたちではないかとあらためて驚かされる。

実際、子どもたちは、家族にもクラスメートにも、身知らぬ人々にも、自分からすすんで手伝ったり、親切にする機会は極めて少ない。そして、その理由を図6－7のように、自分が「親切にしてあげなければならないことが少ないから」ととらえている。さらに、周囲の人々に対し「自分にあまり親切にしてくれない」とか、「親切にしてあげても、それほど自分に親切にしてくれない」といった不満も強い。また3割近い子どもが「自分が損をしたくないから」とも答えている。

親切にしてもらうことばかりを期待し、周囲の思いやりのなさを指摘しながら、自らは「思いやりを示すチャンスがない」という。われわれは、もっと日常的、具体的な思いやり行動のしつけを行い、手伝いを含めた日常的な行動を通して、思いやりの心を育てていかなければならないようである。そうした経験のくり返しの中で、クラスの風土がよりあたたかく、いごこちのいいものになることを子

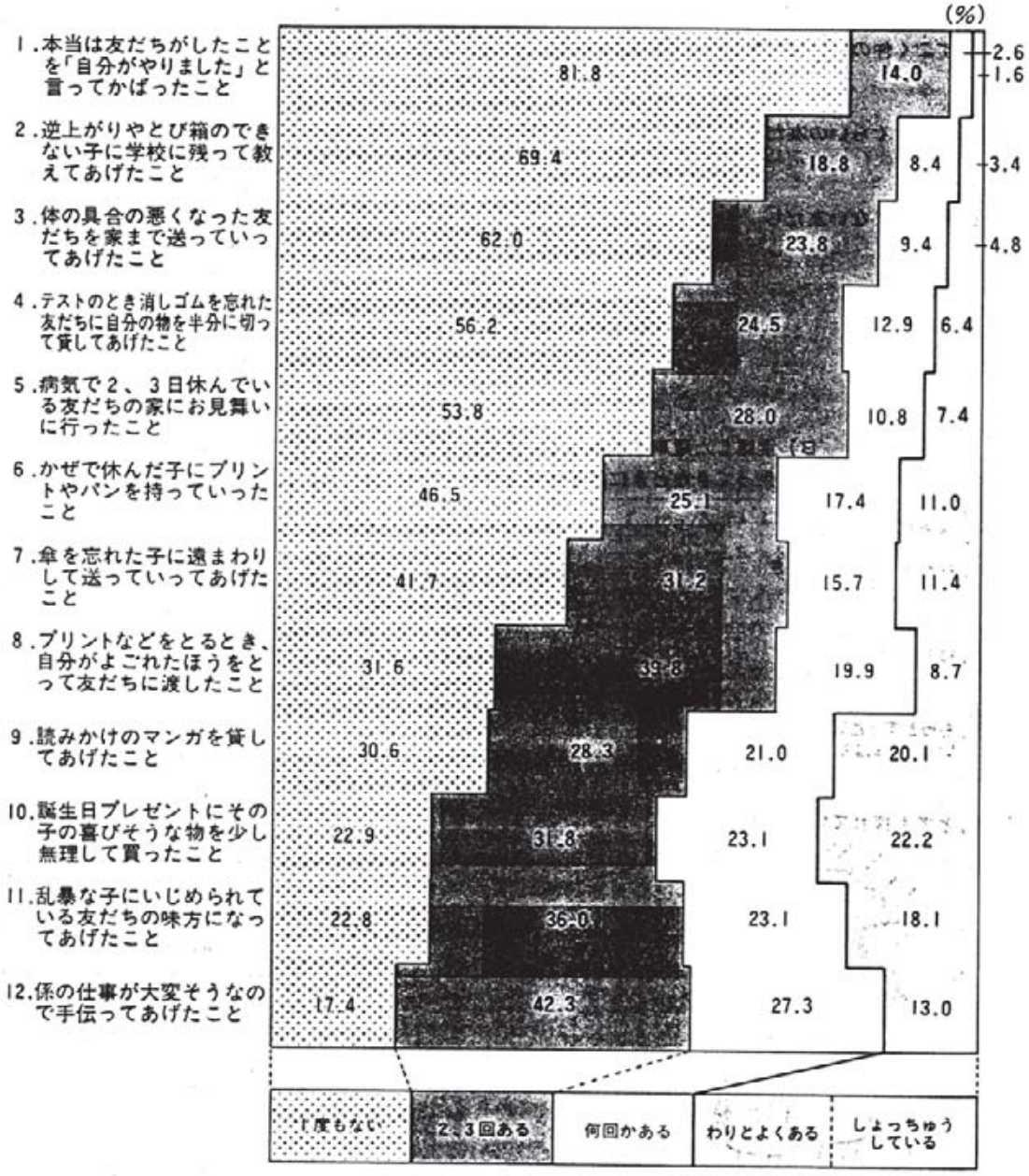
図6－4　いじめられた体験と学校への適応



(vol.4－2「いじめ」より)

どもたちにたっぷりと味わわせてやりたいと思う。まず家庭が、そして学校、学級が、子どもにとって「あたたかい」社会であるよう努力することが、子どもたちの心のひずみに対する何よりの対応となろう。

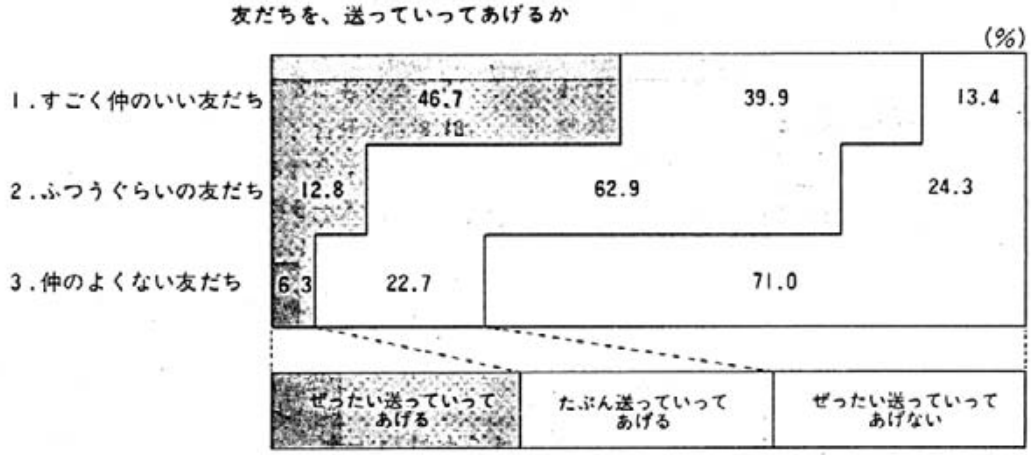
図6－5　クラスの友だちにしてあげたこと



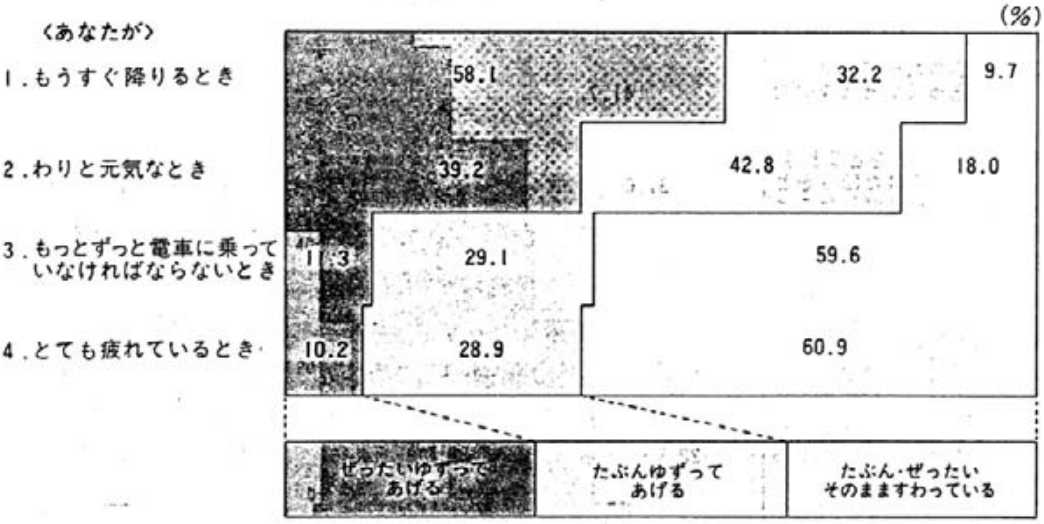
(vol.5－9「思いやり行動」より)

図6－6　思いやり行動のレベル

A）下校時に雨の中、自分の家と反対方向の遠い家の傘のない友だちを、送っていってあげるか

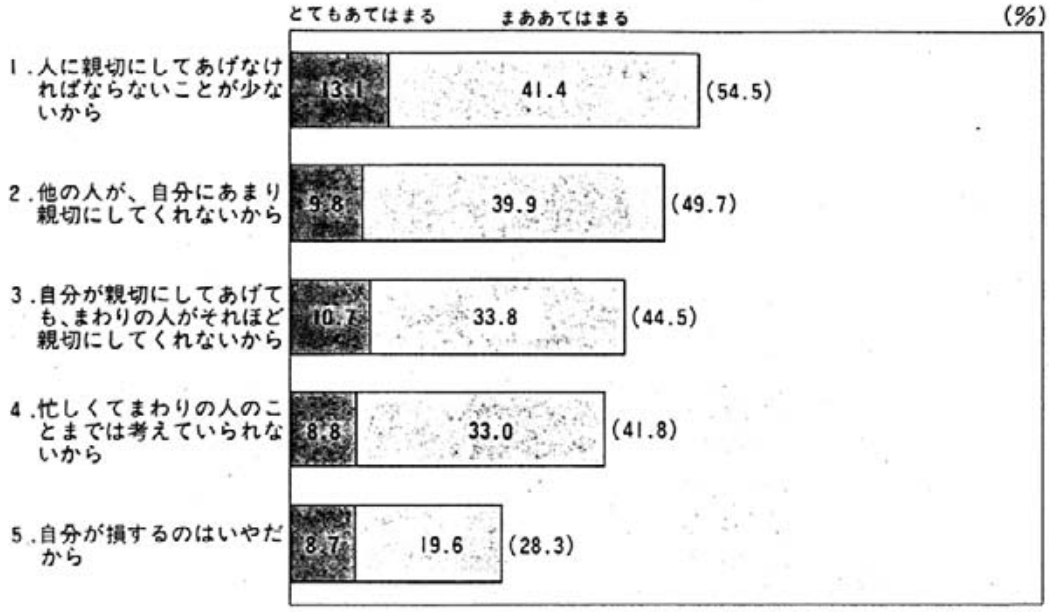


B）混雑した電車ですわって、次の駅で70歳くらいのおじいさんが乗ってきたときに席をゆずるか



（vol.5－9「思いやり行動」より）

図6－7　人に親切にしないわけ



(　)内の数値は「とても＋まあ」あてはまる割合

(vol.5－9「思いやり行動」より)

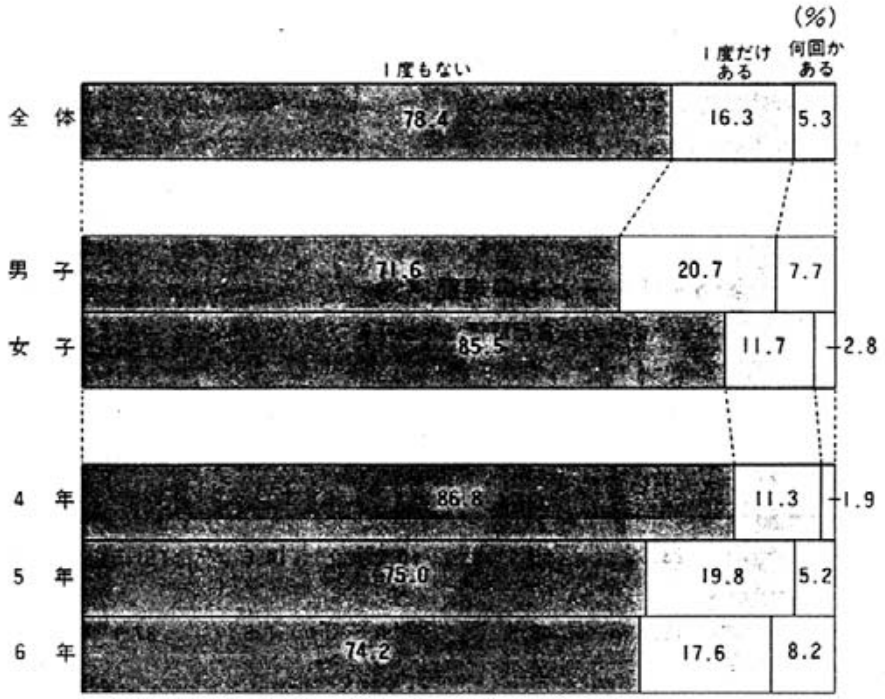
3. 規範意識の崩れをめぐって

近年の少年非行の現状から、低年齢化、一般化、粗暴化に加え、万引き等の初発型非行の増加、シンナー吸引等の好奇心型非行の増加、そして性非行を含めた女子非行の増加といった傾向が注目されてきている。ごく普通の家庭の、ごく普通の子どもたちが、突如として非行化する可能性が高くなっているという。われわれが気づかないうちに、子どもの耐性欠如、情動調節の未熟さ、規範意識の崩れ等、新たな病理現象がひろがりつつあるのだろうか。関連するデータをひろってみよう。

図6－8は、子どもの喫煙体験をたずねた結果である。全体の2割ほどが体験者だが、小学4年生～6年生の5％が「何回も吸った」子どもたちである点が気にかかる。とくに男子の喫煙体験率は高く、学年を追ってジワジワと増加している。6年生の男子では、12％もの子どもが「何回も」吸ったことがあるという。彼らの属性を分析してみると、父親の喫煙率が高く、子どもの規範感覚（「きまりを守る」）のゆるいグループに多く見られる。おとながやっていることをなぜ子どもがやって悪いのだ――そんな声が聞こえてきそうである。図6－9では、子どもの飲酒と喫煙が悪い理由をたずねてみた。理由のトップは、やはり「体に悪いから」であるが、アルコールよりタバコのほうが、率が高くなっている。「法律で決められているから」が約半数、以下の項目は、さらに肯定率が低い。そして、こうした理由づけも学年と共に肯定率が下がり、次第に説得力のないものになってゆく。とくに男子では、こうした傾向が顕著である。

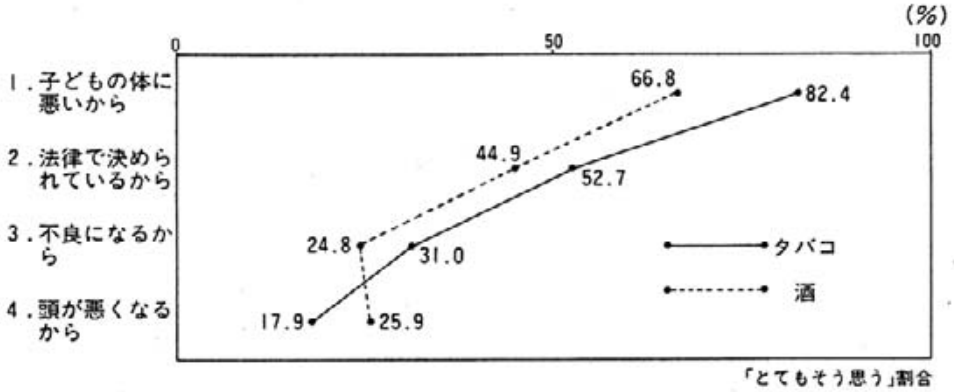
子どもの規範感覚とおとなへのあこがれや親和性のデータをまとめてみたのが表6－1である。日常生活において、「きまりを守らない子」と自己評価する子は、バイクや車の免許を早くとりたいし、アルコールやタバコに対する親和性が高い。おとなになったらタバ

図6－8　子どもの喫煙体験



(vol.7－1「おとなとの距離」より)

図6－9　子どもの飲酒と喫煙が悪い理由



「とてもそう思う」割合

(vol.7－1「おとなとの距離」より)

コも吸うし、酒も毎日飲みたいと答える子が多い。彼らが思春期を迎え、おとなの歯止めがきかなくなったらと思うと、やはり非行化が心配される。このデータが示すように、子どもの中に健康な規範感覚を育てそこなってしまっているとすれば、子どもが簡単に一線をこえて非行化していく現状もうなづけよう。「まだ、子どもだから」と言わずに、子どもたちの中にどうやったら健康な規範感覚を育てることができるか、われわれは真剣に考えなければならないだろう。

表6－1　子どもの規範感覚

——自己評価（きまりを守る）との関連で——

(%)

		バイクの免許を16歳でとりたい	車の免許を18歳でとりたい	おとなになったら毎日飲酒する	ぶどう酒は何杯飲んでもよい	タバコのいたずら経験なし	おとなになったら喫煙する
きまりを守る	とても守る	28.6	55.1	10.2	14.6	91.5	12.5
	わりと守る	18.1	45.5	1.0	1.5	87.1	8.6
	ふつう	22.6	45.5	1.8	4.1	79.9	11.3
	あまり守らない	32.1	53.5	2.9	10.7	69.4	20.8
	ぜんぜん守らない	51.4	64.9	13.5	42.9	52.8	33.3

（vol.7－1「おとなとの距離」より）

4. 親たちはどう見ているか

これまでふれた子ども社会の病理現象を、親たちはどのように見ているのであろうか。

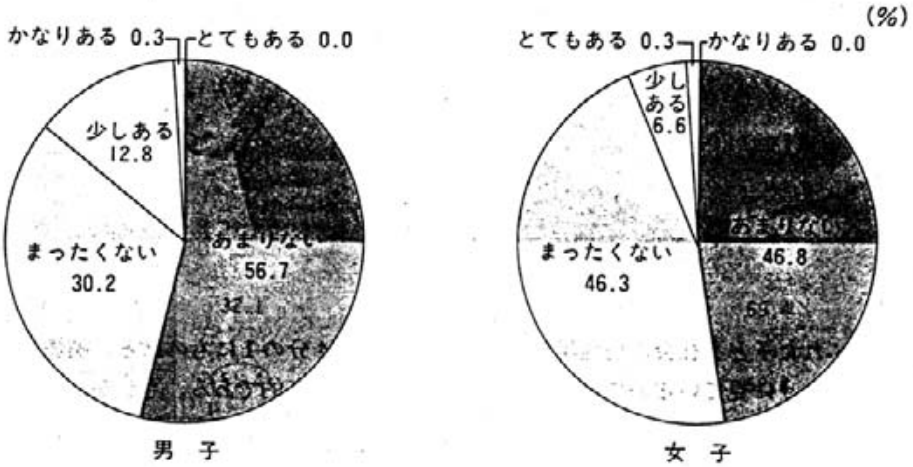
まず、非行問題についてみてみよう。図6－10は、将来、わが子が非行化する可能性があると思うかをたずねた結果である。全体として親たちは、ほとんどその可能性はないと答えている。やや過剰なまでのわが子への信頼感である。前にふれたように、6年生ともなれば子どもたちはおとなの世界へのあこがれを抱き、けっこう冒険もしていた。非行化のきざしと受け止められるデータもいくつか見られた。そうした子どもの実態に照らしてみると、やはりもうひとつ親の見通しの甘さが気にかかる。さらに表6－2をみると、子どもの初発型非行（万引き、喫煙）に対して、親たちの対応が概してゆるやかな点も見受けられる。高額な盗みや万引きには、きびしく対応しても、「500円程度のオモチャなら」と少額の万引きについて、それほど強く叱らない親が4分の1にものぼる。喫煙については、さらに許容的である。もしかしたらこうした親の中のケジメのあいまいさが、子どもの規範感覚の崩れを助長しているのではないだろうか。

非行の専門家は口をそろえて、初発型非行への毅然とした対応こそが非行化の歯止めと指摘する。むろん、非行防止がわれわれ親の共通の願いである。とすれば、なおさら危険な中学生期を目前にした子どもの非行についての見通しや対策をもっと持つべきではないかと反省させられるデータである。

さて、少なくとも子どもの非行化については、やや楽観的すぎるように見える親たちであったが、わが子の姿全体については、どのように評価しているのであろうか。これまでの子育ての満足度をたずねた結果が図6－11である。まず、親子関係と健康の面では、8割もの母親が「思いどおりにいっている」と

大きな自信を示している。一方、下位の項目をみると、やはり勉強や才能の面、性格、生活態度の面など、6割を超える母親が不満感を抱いているのも事実である。やはり親にとっての最大の関心は、子どもの学業成績であり、学力を含めた子どもたちの能力についてである。こうした結果は、親子関係から才能の面までそれぞれの分野ごとに詳しくたずねた結果にも共通して見られた。図6－12がそれである。40項目を超える問題行動の中で、出現頻度の高い順に並べてあるが、生活態度の問題に続いて、「成績が思うようにならない」と不満を訴えている。これらは、小学1年生から6年生の母親を対象にたずねた結果である。しかし、意外なほど学年による差はなかった。親が気になる問題行動は、「だらしがない」「根気がない」といったルーズな生活態度や、親に対するやや反抗的な態度、そして勉強ということになる。親が目の当たりにしている子どもの姿というのは、こんな

図6－10　子どもが非行化する可能性



(vol.3－2「非行と親たち」より)

表6－2　非行の程度と叱り方

(%)

	500円のオモチャを万引き	万引きを3回	3000円盗む	タバコを吸う
体罰で叱る＋かなり強く叱る	56.6	75.3	79.6	40.9
わりと強く叱る	17.1	8.4	8.2	15.1
話してきかせる	26.3	16.3	12.2	44.0

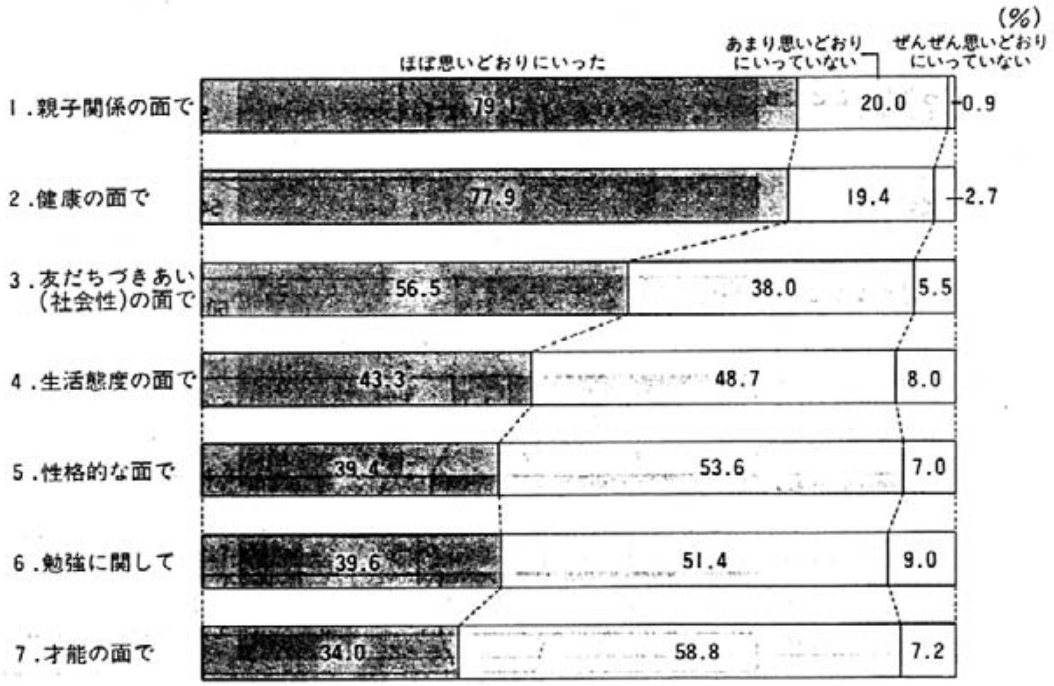
(vol.3－2「非行と親たち」より)

ものなのだろうか。子どもの中にひろがっている病理とは、いささかニュアンスの違うもののようにも思われるのだが。

最後に、子どもが「かなりの程度の非行をしたとき」という設定で、相談相手の存在をたずねたものが、図6－13である。やはり、まず夫、そして担任、自分の父母、兄弟と続く。担任を除けば、ごく身内の人々であり、深刻な非行の相談相手としては、心もとないようにも思われる。これからむずかしい子育ての時期を迎える母親たちにしては、あまりにも心細い支えである。もし、担任との信頼関係が結ばれていなかったり、問題に対処する適切な力量がない場合には、事態を悪化させる危険性をはらんでいる。

これからの学校では、まず教師一人一人が、教育相談や生徒指導に対する専門的能力を持つことが必要であることはいうまでもない。加えて、子育てに迷う母親たちの身近に、利用しやすい教育相談機関を設け、一般の人々

図6－11　子育ての満足度

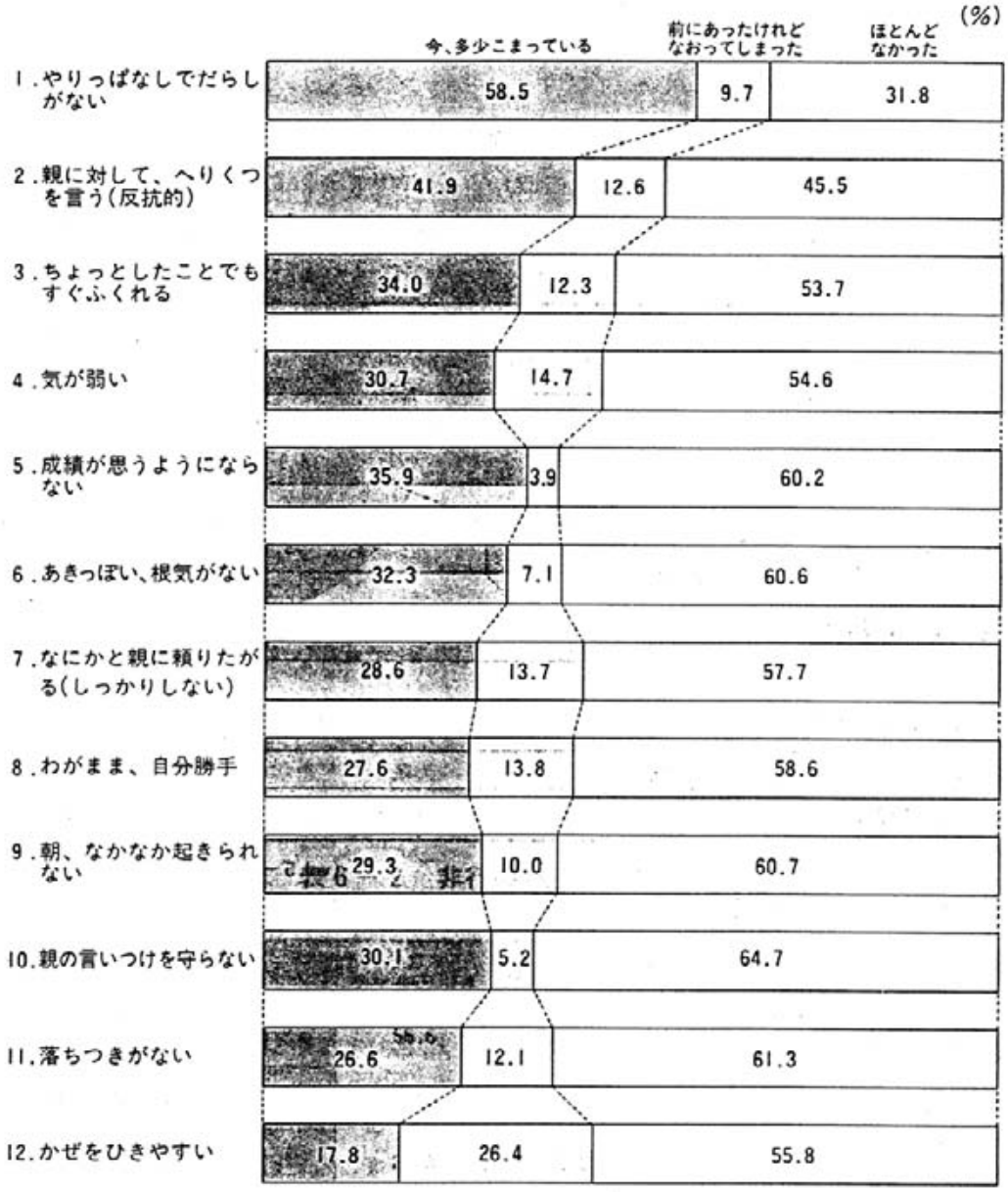


(vol.5－8「問題行動」より)

が早めに専門機関を訪れるような信頼感を育てることも大切であろう。

今日、ごく普通の家庭に育った、ごく普通の子どもたちが、次々と痛ましい事件を引き起こしている。そうした報道がなされるたびに、「もしかしたら、うちの子も」と心配する相談電話がいくつも専門機関に寄せられる。親たちは、たぶんに楽観的な評価をしているものの、わが子の心理状態や行動をどこまで理解できているのだろうか。事件が起きるたびに、子育てを支えるネットワークの必要性を痛感させられる。

図6－12　出現頻度の高い問題行動

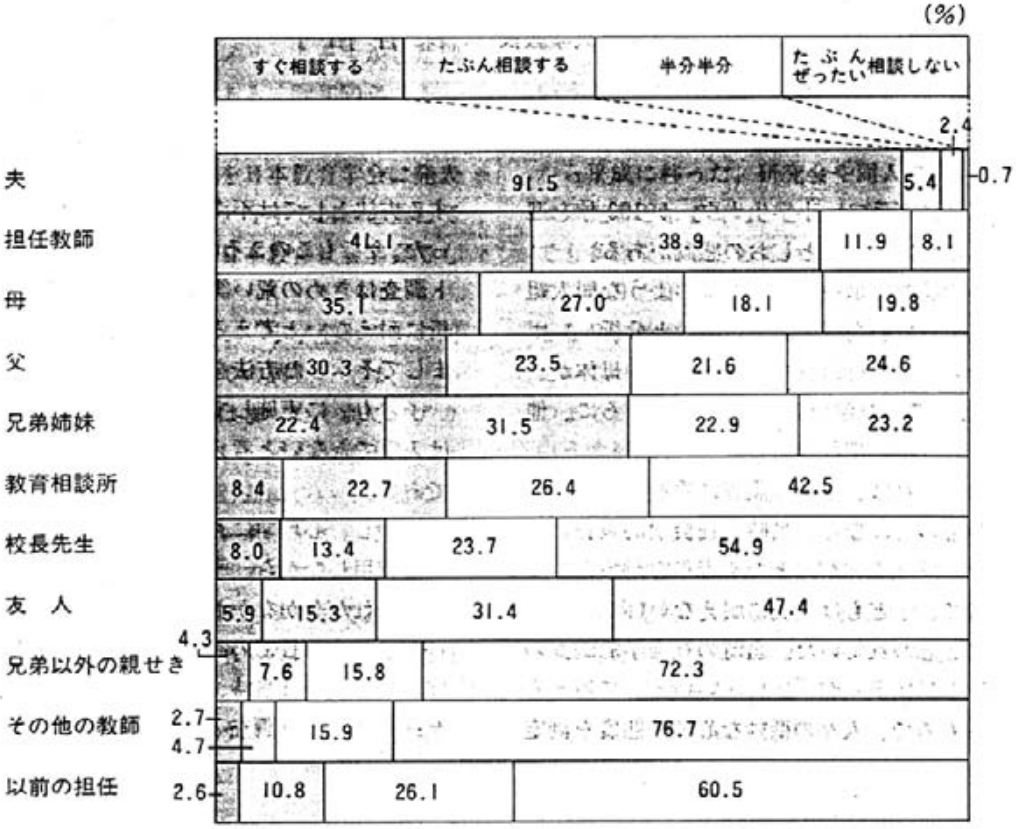


(vol.5－8「問題行動」より)

こう考えてくると、子どもたちが示す病理現象は、われわれおとな社会の病理をまさに反映するものといえそうである。心身の健康さも、思いやりの心も、そしてきちんとしたケジメも、実はわれわれが少しずつ失い、あいまいにしてきたものばかりである。

子どもの心身共に健康な成長を願って、われわれおとなたちがそうした課題に向かって努力することが、今求められているのではないだろうか。

図6－13　子どもが非行をしたときの相談相手



(vol.3－2「非行と親たち」より)

おわりに

放送大学客員教授　深谷昌志
東京学芸大学教授　深谷和子

『モノグラフ・小学生ナウ』が100号を迎えたことには、ひとしおの感慨がある。

この調査レポートは、別掲のような同人組織によって、企画・調査・集計と分析・レポートの執筆が行われているが、その母体が、「子どもの行動学研究会」であるところに、他にみられない特色があると思われる。

振り返れば、子ども調査に手を染めたのは20年もの昔になる。当時、社会学的調査といえば、ほとんどがおとなや青年を対象としたもので、子どもは調査に耐えない(向かない)ものと思われていた。当時の社会学的調査の質問項目は多くが「はい・いいえ」で答える形のもので、人々の微妙な心理や態度を測定する方法としては不満を感じていた人も多かった。今でもこのころの認識のまま、アンケート調査はきめの荒い調査法であり、質的な分析に耐えないと考える人々も、少なくない。ましてそうした方法を言語能力の十分でない「子ども」に実施しても、確度の高いデータは入手できないと考える人々が多かった時代である。

しかし、心理学における測定法の知識と経験を利用しながら、子ども調査を始めてみると、これがなかなかおもしろく手ごたえがあった。尺度としての調査項目を十分工夫すれば、面接調査（当時、質的に深い調査はアンケートより面接調査と考える人が多かった）

よりはるかにシャープで客観的で、しかも質に迫る分析が可能なことがわかってきて、われわれは日本教育社会学会で結果の発表を始めた。昭和46年のことである。

その後しばらくして、小・中学校の先生方と若手研究者を加えて、子ども調査の研究会を発足させることになった。理論や調査の方法論はもつが、子どもに直接ふれる機会の少ない研究者と、子どもをよく知っており問題意識はあっても、必ずしも研究方法を十分身につけていない現場の教師たちがジョイントチームを組み、相互のメリットを生かした調査研究を企図したのである。昭和50年であった。

その研究調査の結果を日本教育学会に発表することが慣例となり、今年で14回を重ねている。数年前からは、日本教育社会学会でも発表を続けている。

そのメンバーの一部が「小学生ナウ」の同人たちである。研究会での調査研究は、「小学生ナウ」のテーマとはまったく別で、アカデミックな研究を目指し、「小学生ナウ」は現代の子どもの意識や行動について確度の高いデータを読みやすいレポートにして、広く教師や親たちの利用に供することを狙いとした。寝ころんで、または電車の中で20分で読める、しかし内容は高水準のレポートの刊行が目標だった。

「小学生ナウ」はもうひとつの特徴をもっている。調査票と集計表を巻末にそえたことである。当時アンケート調査は、項目を明示しないまま結果（数字と解釈）を云々することが多かった。しかしこれではどういう目盛りの物差しを使ったかを示さずに、対象を何センチと報告するのに似ている。質問項目というものは、後で見直すと不満の多いのが常なので、研究者の心理としてはできれば伏せておきたい気にさせられる。それをあえて巻末につけたことで、後になってみると、われわれの調査の数字は主観性の少ないものとして、多くの人々に利用される結果となったという気がする。

100号といえば10年。その間に時代は昭和から平成に移った。研究会や同人のメンバーは研究者として育ち、むろんそれぞれの職場でも多様な活躍をしている。はからずも昭和の終わりと平成初期の子どものデータバンクとなり、教育現場で予想以上に利用していただいているようすの「小学生ナウ」が、今後いつまで続けられるか。同人が今後さらにどういう成長をみせるか。新しい同人の加入の期待も含めて楽しみなところである。

終わりに当たって、このデータバンクのよき理解者であり、後援者であられた福武書店福武哲彦先代社長(故人)、そしてまた福武總一郎現社長と、このレポートの作成と刊行の陰の支え手である福武書店教育研究所の方々に心からお礼を申し上げたい。

「モノグラフ・小学生ナウ」テーマ一覧

VOL	テ　ー　マ	調査時期	調査地域	調査対象	サンプル数
1-1	家庭学習について	'81.2～3月	東京・神奈川・奈良・大阪	4・5・6年生	2,049人
1-2	子どもとテレビ	〃	〃	〃	〃
1-3	子どもの中の未来像	'79.4～5月	山形・長野・大阪 福井・滋賀	4・6年生・中2	2,462人
1-4	子どもとまんが	'81. 6月	東京・千葉	4・5・6年生	1,477人
1-5	手伝いを考える	'81. 5月	〃	〃	1,520人
1-6	子どもとお年玉	〃	〃	〃	1,466人
1-7	叱り方と子ども	〃	東京・奈良・大阪	〃	1,840人
1-8	子どもとスポーツ	'81. 6月	東京・千葉	〃	2,069人
1-9	子どもと朝食	'81. 9月	東京	〃	2,010人
1-10	子どもの持ち物	〃	〃	〃	1,925人
2-1	子どもとこづかい	'81. 6月	東京・千葉	〃	1,824人
2-2	子どもと給食	'81. 11月	東京・奈良・大阪	〃	2,173人
2-3	子どもと夕食	〃	東京・千葉・奈良・大阪	〃	1,946人
2-4	子どもの経済感覚	〃	東京・千葉・宮城	〃	1,966人
2-5	子どもにとっての学級	'81.9月、'82.9月	大阪	〃	813人
2-6	異性の友だち	'82. 2月	東京・千葉	〃	1,705人
2-7	働くお母さん	'82. 5月	東京・千葉・埼玉	〃	2,170人
2-8	読　書	'82.5～6月	大阪	〃	1,459人
2-9	基本的生活習慣	'82. 6月	東京	2・4・5・6年生	1,578人
2-10	生活体験	'82. 3～7月	東京・千葉・山形・奈良	3・4・5・6年生	1,674人
2-11	夏休み	'82. 6月	東京・千葉	4・5・6年生	1,792人
2-12	ケンカ	'82. 9月	千葉	〃	1,616人
3-1	食事マナーの周辺	'82. 5～6月	東京・千葉	4・5・6年生と その母親	965人 488人
3-2	非行と親たち	'82. 9～12月	東京・千葉・静岡・徳島	4・5・6年生の母親	942人
3-3	学業成績	'82. 11月	東京・大阪	5・6年生	1,419人
3-4	自然体験	'83. 2月	東京・千葉	4・5・6年生	979人
3-5	友だちとしてのペット	'82.11～12月	大阪・奈良	〃	1,290人
3-6	職業観	'83. 1～2月	東京・千葉・栃木	〃	1,565人
3-7	家庭学習(その2)	'83. 5月	東京・千葉・神奈川	〃	1,849人
3-8	子どもと偏食	'82. 5～6月	東京	4・5・6年生と その母親	907人 693人
3-9	子どもの求める教師像	'83. 6～7月	東京・千葉	4・5・6年生	1,179人
3-10	友だち	'83. 6月	東京・神奈川・茨城	〃	773人
3-11	メ　カ	'83. 9月	東京	〃	1,461人
3-12	地　域	〃	千葉・兵庫・奈良 新潟・広島・島根	〃	1,802人
4-1	子ども部屋	'83. 10月	東京・千葉・埼玉・茨城	〃	1,634人
4-2	いじめ	'83. 12月	東京・千葉	〃	2,123人

VOL	テーマ	調査時期	調査地域	調査対象	サンプル数
4-3	父　親	'83. 10月	千葉	4・5・6年生	2,069人
4-4	遊　び	'83. 6～7月	全国	3・4・5年生	2,518人
4-5	手伝い(その2)	'84.2～3月	大阪・奈良	4・5・6年生	1,664人
4-6	子どもと祖父母	'84. 2月	宮城・神奈川・静岡・東京	〃	1,665人
4-7	そうじ	'84. 2～3月	全国	教師	1,020人
4-8	学習塾	'84. 4～5月	東京	4・5・6年生	1,688人
4-9	児童規則	'84. 2月	全国	教師	1,134人
4-10	こづかい(その2)	'84. 6月	京都・奈良・大阪・兵庫	4・5・6年生	1,573人
4-11	コミュニケーション	'84. 7月	茨城・東京・神奈川・静岡	〃	1,790人
4-12	お母さんの教育観	'83. 10月	東京	小学生の母親	980人
5-1	ヒーロー	'84. 9～10月	東京・千葉	4・5・6年生	1,830人
5-2	睡　眠	'84. 10月	〃	〃	1,019人
5-3	修学旅行	'84. 12月	全国	教師	920人
5-4	病　気	〃	東京・神奈川	4・5・6年生の母親	1,744人
5-5	消費生活	'85. 1月	〃	4・5・6年生	1,576人
5-6	教科(社会科)	'85. 2～3月	東京・千葉・神奈川	6年生	1,965人
5-7	読書(その2)	'85. 5月	東京・奈良	4・5・6年生	763人
5-8	問題行動	'85. 4～5月		1～6年生の母親	1,325人
5-9	思いやり行動	'85. 5～6月	東京・千葉	4・5・6年生	1,430人
5-10	性役割	'85. 4月	〃	〃	1,494人
5-11	教科(算数)	'85. 6月	東京	5・6年生	1,234人
5-12	学用品	'85. 6～7月	東京・神奈川	4・5・6年生	1,369人
6-1	体　罰	'85. 11月	東京・千葉	4・5・6年生・中1と その母親	1,338人 1,788人
6-2	子どもの休日	'85. 11月	東京・神奈川・千葉	4・5・6年生	1,344人
6-3	教師の生活と意見	'85.11～12月	全国	教師	885人
6-4	おやつ	'86. 2～3月	東京	4・5・6年生	1,238人
6-5	ニューメディア	'86. 1～2月	〃	〃	1,708人
6-6	運動会	'85.11～12月	全国	教師	1,113人
6-7	おしゃれ	'86. 3～4月	東京・新潟・大阪 奈良・兵庫	4・5・6年生	1,394人
6-8	子どもの中の民主主義	'86. 5～6月	東京・千葉・神奈川	5・6年生	1,460人
6-9	卒業式	'86. 4～6月	全国	教師	866人
6-10	入学式	'86. 6月	〃	〃	564人
6-11	自　分	'86. 7月	東京・千葉・神奈川	4・5・6年生	1,495人
6-12	子どもの放課後	'86. 7～9月	東京・千葉	〃	1,707人
7-1	おとなとの距離	'86. 10月	〃	〃	1,336人
7-2	テレビゲーム	'86.11～12月	東京・神奈川	〃	1,608人
7-3	歴史上の人物	'86. 12月	東京・千葉・静岡・山梨	5・6年生	1,793人
7-4	2年生白書	'86.11～12月	東京	2年生の母親	1,492人
7-5	働くお母さん(2)	'87. 1～2月	〃	1～6年生の母親	1,669人
7-6	部活動と社会体育	〃	千葉	4・5・6年生	1,519人

VOL	テ　ー　マ	調査時期	調 査 地 域	調査対象	サンプル数
7－7	通知表1	'87. 2月	東京・千葉・埼玉 茨城・秋田	5・6年生	1,434人
7－8	通知表2	〃	全国	校長先生	446人
7－9	音　楽	'87. 5～6月	東京・神奈川	5・6年生	1,173人
7－10	スキンシップ	'87. 6月	東京・千葉・埼玉・広島	4・5・6年生	1,411人
7－11	新入生白書	'87. 7～9月	東京	1年生の母親	556人
7－12	テレビ	'87. 9～10月	大阪・愛知・神奈川	4・5・6年生	1,409人
8－1	わが住む町(地域)	'87. 10月		4・6年生	1,516人
8－2	働くお母さん(3)	'87.10～11月	東京・千葉	4・5・6年生	1,122人
8－3	父子関係	'87. 6～9月	東京	4・6年・中学生の父親	3,500人
8－4	からだと健康	'87.11～12月	〃	4・5・6年生	1,492人
8－5	学習塾	'88. 1月	〃	〃	1,481人
8－6	やる気	'88. 2～3月	〃	〃	1,022人
8－7	授　業	'88. 1～2月	東京・千葉・神奈川	5・6年生	836人
8－8	給食(2)	'88. 2～3月	東京	4・5・6年生	1,622人
8－9	子どもの道徳心をめぐって	'88. 6～7月	東京・千葉・埼玉	5・6年生	1,469人
8－10	国際比較調査 「7つの都市の子どもたち」	'87. 12月～ '88. 7月	日本・アメリカ 韓国・中華民国 台湾	5年生	6,147人
8－11	中学生生活	'88. 6～7月	東京・神奈川	6年生	728人
8－12	3年生白書	'88. 2～3月	東京	3年生	1,401人
9－1	先　生	'88. 11月	東京・千葉	4・5・6年生	1,451人
9－2	現代父親考		東京・千葉・富山	2・4・6年生の父親	1,221人
9－3	誕生日	'89. 1月	東京・千葉・神奈川	4・5・6年生	1,167人
9－4	国際理解	'88. 6月	千葉・埼玉・茨城	〃	1,724人
9－5	遊び(2)	'88. 3月	東京・千葉・神奈川	〃	1,165人

※全国調査は郵送、それ以外はすべて学校通しによる質問紙調査。
※vol.1－1～vol.7－12、vol.8－3、vol.8－10は在庫切れです。